水面の月～The Reverse Of The Girl～

シンイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水面の月～Ｔｈｅ　Ｒｅｖｅｒｓｅ　Ｏｆ　Ｔｈｅ　Ｇｉｒｌ～

【Ｎコード】
Ｎ４９９４Ｗ

【作者名】
シンイ

【あらすじ】
突然、中世の日本のような世界に放り出された一人の男子高校生。しかし、異世界での生活はけして楽しいものではなかった。
『水面の月』のもう一つの話。「影映り」の向こう側、“彼”の世界が舞台です。

『水面の月』月下辺のお話になります。
この小説だけでも楽しめるような話作りを心がけていきますが、別連載『水面の月』を読んでいただくと、より世界観が分かると思

います。

彼のプロローグ

ザーザーと激しい雨がもう二日も降り続いている。空はどんよりとした重たい雲がかかり、目の前は真っ白とも真っ黒とも言えない曖昧なグレーで煙っていた。激しく打ち付ける雨音が蹲る少年の聴覚を支配している。おかげで、こんなに雨音がうるさいのに彼は静寂に包まれていた。

少年はほとんど崩れかけている空き家の中にいた。戸口の近くで膝を立てて座り、じっと動かない。フーッフーッと息を殺して外の様子を伺っていた。きらっと反射した緑の眼鏡が鋭く光る。ぎらぎらとした荒々しい感情を押し殺すその姿は、まさに手負いの獣のようだった。彼の隠れるぼろい空き家は、天井の板が所々腐り落ちており、雨漏りというのがおこがましいほどの水が入ってくる。しかし、制服の紺のズボンもシャツも濡れて全身に張り付いていれば、そんなことは微塵も気にならなかった。

外の気配を探りながら、少年はこの半月のことを思い出していた。

突然だったのだ。本当に。あっという間に自分の取り巻く景色が変わった。歴史の資料集の中で見た、中世の日本のような町並みに放り出されたのだ。持っているのはジャージの入ったスポーツバッグだけ。周りの人間はまるで映画村から来たような、時代錯誤な奴等でちっとも話は通じなかった。言葉は同じ日本語なのに、会話ができない。部活帰りの少年を彼らは化け物が現れたと言って大騒ぎを始めたのだ。その後は一対多勢の鬼ごっこだ。鎌やら鍬やら、物騒なものを掲げられながら鬼の形相で追いかけられる。どっちが化け物だと思いながら、見慣れない土と木でできた町を、右に左に逃げ回り、くたくたになったところで、老夫婦に匿われた。彼らは、親切に寝床と質素な食事を用意してくれた。疲れきっていたので、明日このわけの分からない事情を話そうと眠りについたが結局それ

は叶わなかった。
ふと物音に眼が覚めると誰かが近寄る気配がする。不審に思って寝たふりのまま様子を見れば、丁度老夫婦が自分に向かって包丁を振り下ろすところだった。間一髪、身体を横に捻りそれをよけると、眼鏡だけ掴んで身一つで外に飛び出した。真っ暗闇の中を必死に駆け抜け、どこに向かっているのかもわからないまま一晩中走り続けた。

それからは地獄の日々である。

今まではどこにでもいる極普通の高校生だったのに、ここでは近寄るのも怖しい化け物だった。新しい集落へ行っても、そんな自分にまともに取り合ってくれる人間はどこにもおらず、ただ、集落の隅のほうでじっとしている他なかった。

そして、問題だったのが食べ物の確保である。荷物も財布もあの老夫婦の家に置いてきてしまったし、どちらにせよ自分の持っていたお金が使えるとは思えなかった。彼らは皆穴の開いた丸い銭で売買をしている。近くで見たこと無いのでいまいち判断つかないが、あれは銅銭というやつではないだろうか。現代の金も、この世界の金もないのでは買い物で食い物を買うことはできない。しょうがないので水とその辺の野草で我慢することにした。しかし、現代っ子に食べられるものと毒草とを見分けられるわけが無い。すぐにはずれを引いて、三日三晩ひどい腹痛に苦しんだ。その時に見た母親に看病される夢は、泣いてしまうほど温かくて優しい悪夢だった。

この半月でいつも思うのは、何故自分がこんな目に遭わなければならないのかだ。周りから奇異と怖れの目で見られた時。半日近く追いまわされた時。老夫婦に殺されそうになった時。毒草にあたって死ぬ思いをした時。飢えに耐えられず、人様のものに手を出してしまった時。いつも、いつもその言葉が頭の中で激しく暴れだす。今だってそうだ。町中の人間にまた追いかけられている。彼らは本気で自分を追い出しにかかったらしい。何故、何故と思いながら、

ぐっと呻いて脇腹を押さえた。汚れた白いシャツに血が滲んでいる。いくつか物を投げられたから何かが当たっていたのだろう。気が付かなかった。しかし、なんてことはない。これも日常だ。これが日常だ。

もう帰りたいなんて思わなかった。帰れなくてもいいから、もっとまっとうな生活がしたかった。

朔の日の終わり　1

春日部千次郎幸望公が第八代当主になられたそうだ。今市中を流れる噂はもっぱらこれであった。ようやく長かった跡継ぎ問題のいざこざも終わり、空いたままだった鹿角城城主の席も埋まる。しかし、それを噂する市民たちの声は暗く、表情も落胆の色が隠せなかった。この新しい殿様は先代の第五子で、母親は正室である。まだ二十代で若く、人柄が良い。ここまでなら、なんの申し分もないのだが、ただ、その人の良さが彼の最大の短所なのだ。彼の領民は、この幸望公が家臣たちのただ傀儡でしかないことを知っていた。家臣が白といえば白に、黒といえば黒という男である。もし、腹違いの第四子や、第六子ならばあの城に巣食う古狸どもと渡り合えただろうに、何故最悪の人選になったのか。領民たちは、ただ涙するばかりである。彼の評判は良くも悪くも近隣諸国に届いている。これからは厳しい時代になる、と誰もが唇をかみ締めた。

なんとか半月持った。今、満尋が思うのはそれだけである。崩れかけた空き家に身を隠しながら、獣のように生きてまだ半月。学校帰りにタイムスリップしてから、小説のようないいことなんて何もない。ただ、命だけがなんとか無事である。血と泥で汚れた制服はボロボロで、さらに雨にも降られたので全身びしょびしょだ。服の破れたところからはいくつもの傷が覗いている。碌に手当てもせず不衛生なままだったので、化膿しているところもあった。

（あいつら、もう行ったか？）

もう何度目になるのか、この間やってきたばかりのこの町でも満尋は追われていた。正直、ここの連中とは関わりたくないが、山は獣が出るし食べるものがなかった。いや、食べ物はたくさんあるのだろうが、道具も知識もない満尋には手に入れられないのだ。だから、何度追いかけられても町から離れることはできなかった。

（くそっ、俺だってホントはこんなことしたくないんだ）
満尋は適当に引っ掴んできた乾物を握り締めた。この盗んだ僅かな干し肉と魚の干物で食い繋いでいくしかないのだ。
ばしゃり、と雨音に混じって土を踏む音が耳に入ってきた。途端に満尋は緊張し、息を潜めて自身の気配を殺す。満尋は命の危険が迫ると、人間がいかに早く環境に順応するかを体感していた。この半月で、五感は鋭敏になった。もともと近眼なので視力はあまり変わっていないが、暗闇の中でも薄っすらとものを見ることができるようになった。そして、今一番頼りになるのは聴覚だ。ぱしゃ、ぱしゃ、と移動する足音に意識を集中させて自分との距離を測る。大丈夫、まだ遠い。変わったのは五感だけじゃない。あちこち逃げ回ったおかげで、身体もずいぶん軽かった。単純に不摂生で余分な肉が落ちた所為もあるが、体の使い方というものがわかった気がする。肉と魚を結んでいる縄を口にくわえて、できるだけ音を立てないように、地面を這うような低い体勢で崩れた壁まで移動する。野良猫みたいなこの姿が、受験勉強に追われているただの高校生ではなくなってしまったことの証明だ。耳は相手との距離を測り、頭の中では壁に開いた穴から逃げる計画が目まぐるしく展開している。満尋は、確かに自分が変わってしまったことを感じていた。
すぐ近くでピタリと止んだ足音に満尋は警戒を強めた。今身を隠しているところは、ちょっと覗いたくらいでは見えないはずだが、中に入ってこられれば間違いなく見つかる。この時代の人々が盗人にどんな罰を与えるか分からないが、死ぬ可能性も考えておかなくてはならない。自分は一度、彼らに化け物といわれて追われたこともあるのだ。絶対に捕まるわけにはいかない。
足音はしばらく家の前をうろうろした後遠ざかっていった。
満尋は溜め込んでいた息を吐き出すと、壁に背を預けて脱力した。危なかった、危機一髪である。今まで緊張していた分、開放感は大きい。ゆっくり目を閉じて、このまま今日は寝てしまおうと思っていると、

「やはり、いたか」
壁の穴から男が顔を覗かせて言った。
　完全に油断していたため反応が遅れた。すぐに駆け出そうとするが、男が壁から手を伸ばして満尋の腕を掴むのが先だった。今まで出会った町人達と違い、男は鍛えられた締まった身体をしていて、とても振りほどくことができなかった。
「こら、逃げるな。別に捕まえに来たわけじゃない」
「現に今捕まえてるだろ」
　男はそのまま身をかがめて空き家の中へ入ってきた。何とか逃げようとする満尋が言い返すと、笑って「そうだな」と腕を放した。放された腕をさすり男を観察すると、意外と若かった。声が落ち着いていたので結構歳がいっていると思っていたが、たぶんまだ二十代だろう。もしかしたら、自分と二、三しか違わないかもしれない。小袖に括袴という姿は町人達と変わらないが、袴の上から褐色の帯を巻き、腰には太刀を差している。重心のぶれない真っ直ぐな立ち姿は、剣道をずっと続けていた現代の友人にそっくりだ。もちろん、この男の方がずっと完成されていて、隙がないが。こいつからは逃げない方がいいだろう、と判断した満尋は、警戒態勢を崩さぬまま男と話をしてみることにした。
「捕まえに来たわけじゃないなら、何の用で来たんだ？」
「何、化け物退治を請け負ってきたんだが、どうやら依頼主の勘違いのようだな」
「あんたは、俺が人に見えるのか？」
「違うのか」
　まっすぐこちらを射る視線は真剣で、満尋がこちらに来て初めて受けるものだった。
「……違わない」
　搾り出した声は、満尋の中にすとん、と落ちてきた。そして、自分はずっとこれが言いたかったんだと悟る。静かになった満尋を見

て、男はまたふっと笑った。ああ、あれは人に向けてする表情だ。
そのままぐらりと体が傾いて、満尋は意識を失った。

朔の日の終わり　2

ヒグラシの鳴く声が頭の中に響いてくる。身体は温かいものに包まれていて、目を閉じたまま無意識に頬擦りした。だんだんはっきりしてくる意識に、それが布団だと分かると、満尋は勢い良く身体を起こした。

夕暮れの時の西日が部屋の中をオレンジ色に染め上げていた。視界がぼやけているが、ここがあのぼろい空き家ではないことは分かる。つるつるの板敷きの床には埃っぽさがなく、天井からは雨漏り一つしていない。布団から抜け出して立ち上がると、自分が制服ではなく白い浴衣を着ているのに気が付いた。そのまま開けっ放しの戸口へ行くと、部屋の外には縁側のような長い廊下があり、その向こうは塀に囲まれた庭だった。隣にも戸は閉まっているが同じような部屋があるようだ。なぜ自分がこんな所にいるのか理解できなくて、満尋は呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

しばらくすると、満尋の耳がみしみしと床の鳴る音を拾った。それが複数人の足音で、こちらに近づいていることを悟ると、よく見えない目で音のする方を睨み付けた。角を曲がって現れたのは二人の男だった。顔は判断できないが、彼らは一瞬立ち止まると手前を歩いていた男が声をあげた。

「お、もう起きたのか。調子はどうだ」

その声には聞き覚えがあった。あの空き家で自分を捕まえた人間と同じ声だ。それから、目覚める前の記憶が次々と蘇ってきて、自分が途中で気を失ったことまで思い出す。

「ここは……。俺をどうするつもりだ」

「まあ、待て。悪いようにはせん。部屋の中で話そう」

睨み付ける満尋を軽くいなして、男はそのまま部屋の中に入っていった。後ろを付いてきた別の男が、微笑を浮かべて中へ入るよう促したので、満尋はしかたなく二人に従った。さらに男は布団に入

るよう勧め、満尋もまだ体がだるかったので大人しくまた布団に戻った。
「話の前に俺の眼鏡を返せ」
かなりのド近眼なので無いと不便だ。枕元には置かれていなかったから、彼らが持っているのだろう。
「めがね？　なんだそれは」
「……レンズ、じゃない。透明な、とにかく俺が顔に掛けていたものだ」
なるべく外来語を使わないようにしたら、うまく説明できなかった。身振り手振りで伝えたら、
「ああ、あの変わった玻璃細工か」
と思い当たったのか、懐から丁寧に布で包まれたものを取り出した。玻璃が何なのか分からないが、それを受け取り布を開くと、見慣れた細い緑のフレームの眼鏡が出てきた。すぐにそれを掛けるとぼやけた輪郭がはっきりし、自分を捕まえた精悍な顔の男と、見知らぬ狐目の男が目の前に現れた。
「その〈めがね〉という精巧な細工をどこで手に入れたのか。いろいろ聞きたいことはあるが、先にお前の名を聞いておこう」
二人の男は布団の横に腰を下ろした。狐目の方は喋らないのか、話せないのか、話はもう一人に任せてにこにこしている。
「人に名前を聞くときは、まず自分から。じゃないのか？」
悠然と構える男たちの態度が気に食わなくて、素直に答えることはしなかった。向こうに話の主導権を握られたくない、というのもある。
あばら家で会った男は、くっと口の端をあげて笑った。
「威勢がいいのは悪くない」
ヒタリ、冷たい何かが満尋の首筋に当たる。
「だが、時には従順になることも必要だ」
殺気とでもいうのだろうか。男からびりびりとした鋭利な空気が発せられた。男の横に置かれていた太刀が、いつの間にか抜かれ満

尋に当てられている。項の毛がぞわりと逆立って、冷たい汗が流れた。息を呑むこともできずに固まっていると、刃は満尋のどこを傷つけることなく鞘に収められた。

「お前の名は何だ」

再び尋ねられた問いに、苦さを噛み締めながら自分の名を答えた。空き家であった男は、満尋の様子を見て満足そうにすると、自分は鴻池宇木衛門（こうちうきえもん）だと名乗った。狐目の男は佐久間六郎というらしい。

「ここはあの町から一里ほど離れたところだ。俺たちは？衆（のすり）で、俺がその頭だ。ここはその拠点だな。お前を連れてきたのも、仲間になってもらおうと思ってのことだ」

一里。満尋は以前読んだ歴史小説を思い出した。細かい数字は忘れたが、だいたい四キロメートルくらいだった気がする。それが、遠いのか近いのかはいまいち分からないが。それに？衆というのも初めて聞く言葉だ。仲間にしたいと言っているが、一体どんな集団なのだろう。

「まぁ、今日はそこら辺にすんべ。あんましうるせーと傷に障っかんな。また明日だべりゃえーべ」

ここで初めて狐目の男、佐久間六郎が口を開いた。優男風の見た目とどこかの訛りが少しミスマッチだった。

傷と言われて改めて自分の体を見てみると、ところどころに包帯が巻かれていた。それを知覚すると、今まで忘れていた痛みがぶり返してくる。

「てーした傷はねっけど、化膿してっからな。おめー、てけとーに放ってたろ。明日また薬塗ってやっから、今日はもう寝とけ」

六郎は立ち上がると、宇木衛門とともに部屋を出た。宇木衛門はまだ話したそうだったが、六郎が有無を言わさず連れ出したので「明朝にまた来る」と言って、部屋を後にした。

遠ざかる足音を聞きながら、このまま逃げ出してしまおうかという考えが頭をよぎったが、久しぶりの柔らかい布団の感触に、自分の意思に反してまた夢の中へと落ちていった。

朔の日の終わり　3

翌朝、宣言どおりに宇木衛門と六郎が朝餉を持ってやってきた。この時代にやってきて初めて食べるまともな飯である。人に刀を当てるようなやつから食事を貰うものか、と思っていたが、美味そうな匂いに腹の虫が我慢できなかった。膳に乗せられた玄米、貝の味噌汁、煮魚を残さず胃に納めると、なんとも言えない幸福感に満たされた。

食事が終わり膳を下げた後は、六郎から傷の手当てを受けた。古い包帯を取り、新しいものに六郎は持ってきた木箱に入っていた薬を塗って、腕や腹、足などに手馴れた様子で巻きつけた。その薬がまたとても臭くて、宇木衛門も顔をしかめて部屋の戸を全開にした。

その後、着替えなどの身支度を終えて三人は昨日の続きに入った。二人は、満尋が袴の着方を知らないことに驚いていたが、気さくな六郎が着付けを手伝ってくれた。

「では、？衆の話からか」

部屋に三人座り込んで、宇木衛門が話し出した。

？衆というのは、宇木衛門が集めた自衛集団のことらしい。十代から二十代の若者が中心で、町や村の依頼で見回りや街道に出る賊退治などを請け負っているのだそうだ。その背景には、最近春日部の当主に就いた幸望が関係しているらしい。

「あの人は政（まつりごと）にはとんと向かない人だからな。おまけに、家臣の多くは戦で領を広げようと謀計をめぐらしている奴らばかりだ」

宇木衛門は新しい領主が領民を守ることに期待はしていない。そればかりか、逆に危険視しているようだった。

「町の人間も同じ考えだ。？衆が強くなれば、俺たちを材料に交渉もできる。俺たちで惣をつくるんだ」

宇木衛門はぐっと拳を握った。そこには、彼の強い決意があるのだろう。「惣」というのは確か、室町時代にでてきた自治権を持つ

共同体のことだったはずだ。教科書に良く出てきた「惣村」は、村の防衛や年貢の徴収を自分たちで行っていたそうだが、？衆はその自衛を請け負う集団になろうということだ。満尋は話を聞いて窃笑した。「惣」が出てきたということは、今は室町時代ということだ。今まで人と関わらなかったためにこの世界の情報を得ることができなかったが、彼らからはいろいろと聞き出せそうだ。

「俺からも一ついいか。今は足利の誰が将軍をしているんだ？」

年号で答えられても分からないので、将軍の名前を聞いてみた。これなら、おおよその見当はつく。しかし、返ってきた言葉は意外なものだった。

「足利？　兼定（かねさだ）というものがいたと思うが、あの家は将軍職についたことはないぞ？」

「おれも聞いたことねぇべ。そもそも、将軍なんててーした力はねっからな。今は大名があっちこっちに領国をつくってんべ」

大名が領地を支配しているということは、もう戦国時代に入ったということだろうか。室町幕府の足利家を知らないのは気になるところだが。

「じゃあ、尾張の織田信長は？」

「知らん」

その後も、武田、上杉、今川と名だたる戦国武将たちをあげていったが、誰一人知っていると答えたものはいなかった。さらに、その時に一緒に挙げた尾張や、甲斐といった地名にも聞き覚えはないという。これには満尋もお手上げだった。ここは、過去の日本ではないのだろうか。

「ここは、別暮（わくれ）の国だ。お前くらいの歳なら聞いたことはあるはずだが」

満尋は旧日本の地名もほとんど覚えている。しかし、別暮なんて国は聞いたことが無い。

「ちなみに別暮は、三静（みしず）、岾許（はけもと）、挟河（さかわ）の三国に囲まれている。これも聞いたことが無いか」

「……ない」
どれも初めて聞く国名だ。これは、過去の日本ではないことが確定しそうだ。では、自分は一体どこに来てしまったのだろう。
「おめー、家族はいねーのか？」
「いない。この世界のどこにも」
膝の上に置いた拳を白くなるほど硬く握り締めた。日本史は得意だから、これからはそれでうまく立ち回れると思っていた。しかし、それはできない。
「俺は、？衆の頭としてお前を正式に仲間に入れるつもりで連れてきた。先ほども言ったが、俺は？衆を強くしたい。だが、？衆はまだ駆け出しだ。もっと人が要る」
すっかり威勢を無くした満尋を、宇木衛門は真っ直ぐ真剣な眼差しで見つめた。昨日出会ってから、彼の視線と声は少しも揺らぐことがない。
「俺は、どこの誰かも分からない、盗みを働くようなヤツですよ」
「知っているさ。異国の輸入品よりも珍しいものを身につけて、当たり前の常識を知らないひどい世間知らずだ。それに、お前は盗みを働いたことを悔いているようだが、あの程度の盗みならどこでも日常茶飯事だ。皆それぞれ事情を抱えているからな。このご時世どうしても、まともに生きていけない人間は山ほどいる」
彼は何か思い出すものがあるのか、目を瞑り一瞬沈黙した。六郎も静かに彼の言葉を聴いている。
「それでも、根の腐っていない奴ならば信じようと思う。お前は誰より手はかかるが使えそうだ。まあ、この辺は俺の勘だがな」
そう言って宇木衛門は笑った。それは、自信に溢れた気持ちのいいものだった。
「カリスマってあんたみたいなやつのことだろうな」
きっと意味は分からないだろうが、それでも口に出していた。今まで、ずっと細い綱の上を渡っていたようなものだったが、今ようやく地に足が着いた気がする。

満尋は、今まで楽にしていた胡坐を正座に正し、宇木衛門の方を向いた。そのまま手を突いて床に頭を擦りつけ、

「よろしくお願いします」

と、一言だけ口にした。

上弦に問う　1

？衆（のすり）に加わってから五日ばかりが過ぎた。あれから満尋は何度か体調を崩したが、今はほとんど回復し、新しい生活に少しずつ慣らしているところである。

太陽が昇る頃にはすでに身支度を整え、井戸へ向かう。

満尋は六畳一間の部屋に移り、そこで二人の若者と同室になった。一人あたりの空間がかなり狭くなるが仕方が無い。二人とも満尋と同じ新入りで、初めは気まずいものだったが、二日、三日と経つうちにだんだんと打ち解けることができた。

井戸に行くと先に部屋を出ていた同室の二人が顔を洗っていた。軽く挨拶を交わして釣瓶を落とす。井戸で水を汲むというのは中々大変で、一日使っただけで手の皮がずる剥けてしまった。それを見て、同室の二人には貴族の女みたいだと笑われたが。

「おはようさん、満尋。今日は庭の掃き掃除だってよ。かったるいよなー」

顔を洗い終わっても、まだ大あくびをしているのは同室の一人、勘吉だ。

「しょうがないですよ。当番なんですから。あたしだって本当は嫌なんですよ」

そう返すのは十壱（といち）。彼も同室だ。勘吉はあっちこっち跳ねた髪を手櫛で適当に一括りにし、ぱんっと頬を叩いた。反対に十壱は丁寧に髪を梳いている。腰ほどまである黒髪は、梳くだけでも大変そうだ。

「毎朝ご苦労だな」

「まあ、あたしの家は男も女も髪を大事にしましたからねぇ。あなたも伸ばしたらどうです？」

満尋は男が髪をだらだら伸ばすのに違和感があったが、ここでは短い方が少ない。どんなに短くても紐で結べるほどには長いのだ。

十壱はたいして苦とは思っていないようだが、満尋には面倒に思えて仕方が無い。
「いつも思うけど、そうしてっとまんま女みてぇだな」
勘吉が呆れたように言った。十壱は体の線も細くてどこか中性的だ。さらに、柔らかな物腰がそれを助長させている。対して勘吉は身体を動かすのが大好きで、この三人の中では一番体格がしっかりしている。見た目通りの性格は良くも悪くもおおらかで、たいていのことはごり押しで通そうとするのは、この数日間で良く身に沁みた。これで自分より歳が一個上なのだから驚きだ。
「さあさ、朝餉の時間に間に合いませんよ。今日の朝餉当番には京太郎さんがいますからね。遅れたら抜かれてしまいます」
身支度を終えた十壱が、満尋と勘吉の背を押して歩き出す。十壱は満尋の一つ年下なのだが、この中で一番しっかりしている。勘吉が、そりゃ大変だといち早く駆け出して食堂へ向かった。
この？衆が拠点としている所は、もともとは寺だったそうでほとんど縁を歩いて移動する。まだ夏の終わりだからかまわないが、これから秋が来て冬になれば外を歩くのが厳しそうだと、建物を見ながら思った。しかし、建物自体は立派なものだ。屋根を支える垂木の並びに、格子窓のついた板壁、敷地を囲む塀は白漆喰が美しい。煌びやかではないが、質素な佇まいを満尋はほんの少し気に入っていた。宇木衛門は古くなった寺を改装したから大した事ないというが、文化遺産に住んでいるような気分だ。

「おおーい、こっちこっち。おめーらおっそい。どんだけ待たせんだよ」
食堂に行くとほとんどの衆徒が集まっており、その中で満尋たちに気付いた隣室の二之助が大きく腕を振っていた。二之助は？衆の中では一番年下で、今年で十三になるのだそうだ。二十歳前後が多い？衆の中でも物怖じすることなく振舞い、みんなからは弟として可愛がられているようだ。満尋とは部屋が隣同士ということもあり、

勘吉、十壱と四人で一緒にいることが多い。
奥の厨からお盆を受け取り、食事当番の者からご飯とおかず、汁物をそれぞれ受け取る。二之助が空けてくれた場所に腰を下ろして、食事を始めた。テーブルも椅子もないので皆思い思いの場所に座り、床の上に直接盆を置いて食べる。日本の食事の作法では椀を持って食べることが許されているが、確かにこれは手に持たないと具合が悪い。テーブルに慣れた身としては、少し不便に感じてしまうが。
「満尋たちは今日何するんだ？」
かつかつと飯を忙しそうに掻き込む合間に二之助が問う。お行儀が悪いと十壱に注意されると、食べる方に集中した。？衆では基本的に部屋ごとで仕事や訓練を行うので、日中は隣室の二之助と別行動になるのだ。
「今日は庭掃除をして……、その後は馬術を教えてもらう」
「ん？　お前馬乗れねぇのか？」
山盛りの玄米を食べていた勘吉が満尋を見た。その驚きの視線を受け、満尋は勘吉を少し睨み付けた。馬なんて乗ったことも無ければ、近くで見たことも無いのだ。
「あたしも乗れませんよ。そもそも、あたしらの身分で馬を操れるあなたが特別なんです」
十壱の言葉に二之助も箸を持ったまましきりに頷いている。どうやら、馬に乗れないのは二人も一緒らしい。何故勘吉が馬に乗れるのかと聞いたら、村に馬借を営んでいた家があったのだと言った。馬借は現代でいう運送業のような仕事だ。
「ガキの頃よく乗せてもらってたからなー。俺が教えてやろうか？」
懐かしそうに笑う勘吉を、満尋は少し複雑な気持ちでみていた。？衆は自分のように宇木衛門に拾われた人間がほとんどだ。きっと明るく笑う彼にも、村に居られなくなってしまった事情があるのだろう。だからだろう。ここの人間は皆、人との距離の取り方が絶妙だ。触れられたくないことには踏み込んでこないが、だからといって他人に無関心でもない。満尋が上手くここに馴染めたのも、そう

いう人間ばかりだからだ。
「止めといた方がいいって。勘にぃが教えたら、絶対習うより慣れろで散々な目に遭うに決まってるさ」
「あたしも同感です。基本は大事ですからね。別の方にお願いします」
なんだとお前ら！　と立ち上がる勘吉に、うるせぇと別の場所から野次が飛ぶ。勘吉はしぶしぶまた座ったが、完全に拗ねてしまった。黙々と飯を口に運んでいる。その様子を十壱と顔を見合わせて苦笑すると、満尋は静かに食事を再開させた。

上弦に問う　2

敷地内の一角にある厩では、十数頭の様々な毛色の馬が飼育されている。小屋から首を出している馬はどれも人の背丈ほどしかなくて、思い描いていたものよりも随分と小さかった。勘吉は馬に慣れているだけあって、一頭一頭馬の鼻面を慈しむように撫でていた。十壱は邪魔にならないよう、長い髪の毛をくるくるとまとめている。

馬術の訓練といっても専門の人間がついて教えるわけではない。世話をしているものはいるが、馬に乗れる者が、乗れない者に指導をしているようだ。

今日満尋たちに指導をしてくれるのは、初日に会った六郎だ。

「おー、おめーら待ってたべ。おれが教えっからなー」

いつもの方言で迎えてくれた六郎は、にこにこしながら満尋たちを待っていた。頭の宇木衛門と一緒にいただけあって、彼もなかなか忙しいらしい。六郎とはあれ以来会っていないので五日振りに顔を合わせる。見知った人間に安堵した満尋とは反対に、勘吉と十壱は身体を固くさせた。

「勘吉は随分と達者みてーだかんな、おれが教えんでもいーべ。きいいったのみっけて、飛ばしていーだーよ」

「はぁ、では失礼します」

一緒にいて数日経つが、初めて聞く勘吉の敬語はかなり違和感がある。ぎこちなく身体を動かして、勘吉はすぐに馬を選びにかかった。その様子を不審に思いつつ、乗馬初心者の満尋と十壱は軽く六郎から説明を受け、自分達も馬を選びにかかった。

満尋が選んだのは灰色をした葦毛の馬で、十壱は黄色っぽい河原毛を選んだ。勘吉はこげ茶の黒鹿毛を選んだようだ。どの馬も大人しく、優しそうな目をしている。しばらく馬と戯れた後、六郎から馬の背に乗る指導を受けた。

鞍をつけていない裸馬なので、乗るときは飛び乗るといった感じだ。ポニーほどの大きさなのでなんとか跨ることができたが、サラブレッドのような大型馬では無理だったかもしれない。とりあえず、乗り降りだけを何回か練習していたところで、衆徒が一人六郎に走りよってきて何事かを伝えた。どうやら、緊急の用で六郎はそちらに行かなくてはならないらしい。

「すまんねーけど、ちぃっと行ってくんべ。外出て左ん方行ったら、丁度いいとこあっからな」

六郎は慌しく厩を出て行くと、残されたのは呆けた表情の三人だけだ。いち早く立ち直ったのは勘吉で、黒鹿毛を引きながら喜色満面の笑みを浮かべると、

「お？　これは俺の出番か？」

と言った。嫌な予感しかしない。隣の十壱も顔を引きつらせている。勘吉はひらり、と馬に跨ると、満尋たちにもさっそく乗るように指示した。

「じゃあ、さっそく行くか！　走らせっぞ、ちゃんとついて来いよ」

「ちょ、ちょっと待て！」

「あ、あたし達はまだ騎乗しか習っていないんですよ。先生でしょう。ちゃんと教えて下さい」

ともすれば今にも走り出しそうな勘吉を何とか止めて、馬の扱いを請うてみた。馬の背に跨り、まずは歩かせ方からと十壱が言うと、

「大丈夫、大丈夫。馬は賢いからなー。歩けーって思えば歩くし、止まれーって思えば止まるって」

などと言い出した。そんなわけあるかっと突っ込みたかったが、馬を驚かせるようなことはしてはいけない、と六郎に言われていたので黙らざるを得ない。勘吉はそのままポカポカと門へ向かって移動を始めたので、追いかけねばと慌てると、驚いたことに満尋の葦毛もそれに倣って歩き始めた。

「あの人の言った通りでしたけど……。複雑です」

「……ああ」

門の外に出ると、左の方と言われたのでそちらへ向かうことにした。馬は手綱を行きたい方向に軽く引っ張るだけで、ちゃんとそちらへ曲がってくれる。満尋は揺れる馬の背から落ちないことだけに気をつけて、馬を歩かせていた。

六郎が教えてくれた道は、かなり険しい山道だったが馬はでこぼこの道も、急な斜面もなんなく登っていく。15分ほど登っていくと、道が開けてなだらかな平原に出た。

「おおー、ここなら走らせても大丈夫そうだな」

勘吉の言うとおり、そこでは何人かの衆徒たちが気持ちよさそうに馬を走らせていた。元気の有り余っている勘吉はともかく、満尋も十壱も慣れない乗馬であちこちが痛い。とくに尻が。うずうずしている勘吉に、「休憩してるから、好きに走って来い」と言うと、勢い良く飛び出していった。

馬から降りて、十壱と適当な木陰に並んで座る。馬はすぐ側で草を食んでいる。さらさらと涼しい風が汗ばんだ顔に当たって気持ちよい。天気も良いし、このまま寝転んだら最高だろうと思っていると、十壱がそういえば、と話しかけてきた。

「満尋は六郎殿と知り合いなのですか？　随分と親しそうでしたが」

「ん？　ああ、ここに来たときにいろいろと良くしてもらった。怪我の手当てもしてくれたし、それがどうかしたか？」

十壱は少し苦笑して、

「いえ、ただ六郎殿は？衆の補佐役ですからねぇ。少し珍しくて。それにいろいろとお噂のあるお人ですし」

と言った。なるほど、確かに頭やその補佐についている人間と馴れ馴れしく話せるものはそういないだろう。それにしても、噂とは何だろうか。

「おや、知らないんですか？　なんでも仕えていた主を切り捨てたとかなんとか。まぁ、あたしも聞いた話ですけれど有名ですよ」

この世界のことはまだ良く分からないが、主を切り捨てる、とは大変なことではないだろうか。あのいつもにこにことした明るい六

郎に、そんな噂があるとは驚いた。
「あの言葉訛りは、東の方にある反馬（たんま）の訛りでしょう。七、八年前に領主が若い家臣に殺されていますが、まさか、ねぇ」
六郎の歳を聞いたことはないが、見た感じだと二十五、六くらいだろう。噂が真実味を帯びてきたが、本当に殺していたらその家臣の命はすぐに奪われているはずだ。
「六郎の歳と出身国を結びつけて、誰かが適当に流したんじゃないか？」
「ですよねぇ」
勘吉がものすごいスピードで衆徒五人抜きをしているのを見ながら、そう言うしかなかった。

上弦に問う　3

いつまで座ってんだとやってきた勘吉により、再び馬の背に跨ることとなった満尋は、流されるまま勘吉主催の乗馬レースに参加することになった。

「だから、俺今日が初めてなんだって、聞いてるか？」

うんざりしている満尋を他所に、着々と準備は進んでいる。男ばかりで競争といえば燃えるもの。他の衆徒たちも巻き込んで、総勢十四人によるレースが始まろうとしていた。

「では、ここを一周して山道を一回りし、一番先にここへ戻ってきたものが勝ちです。山道は三又のところを左に折れれば一本道ですから、間違えないようにー」

十壱は真っ先に審判役を買って出て、このレースから離脱した。なんとも要領のいい奴だ。スタート地点に馬を並べて、合図がなるのを待つ。馬たちもなんとなく乗り手の意気込みが伝わっているのか、しきりに鼻を鳴らしたり、足踏みをしている。

「では、よーい……」

ぴぃー、と十壱の指笛が高らかに鳴る。「はっ」と言うと同時に、どどどっと土煙をあげて一斉に馬が走り出す。満尋も遅れまいと手綱を握り締めた。

結局満尋は下から数えた方が早い順位に終わった。まぁ、初めてだし完走したことに意義がある、とマラソンのようなことを思う。一位は当然ながら勘吉だった。子どもの頃から乗り回していたというのは伊達でなく、二位とは圧倒的に差をつけてのゴールだったと十壱が言っていた。

そして驚くことに、このレースは頭の宇木衛門にまで伝わっていた。夕餉の席で、

「お前たち、今日は随分と面白いことをしていたようだな。今度は

俺も混ぜろ」
と、口元を緩めて言われたときは、皆で固まった。
風呂に入った後はもうすることがない。明かりを灯す油は貴重なため、暗くなればさっさと寝てしまうのが、この世界の常識だ。部屋の前の縁に腰掛けて、ぼーと月を見ながら火照った身体を冷やしていると、勘吉が隣に座り込んできた。
「いやー、今日は楽しかったな。競馬（くらべうま）なんて久しぶりだ」
「あんた、あっという間に見えなくなったな。昔から一番だったのか？」
馬の出来が一頭だけ違うのではないかと思うほど速かった。そう言うと勘吉は、豪快に笑った。
「んなわけないだろー。俺はいつも二番だったさ。幼馴染に滅法速いのがいてな。そいつには結局勝てず仕舞いさ」
今なら負ける気はしないんだけどなー、と言う勘吉はやはり何か事情があるのかもしれない。今でなくとも、いつか聞けるだろうか。
「そういうお前は、どんなことしていたんだ？」
子どもの頃を聞いているのだろう。すぐに思いつくのがテレビゲームなのだが、上手く説明できないし、それだと少し寂しい。
「学校で野球……とか？」
口に出して、あっと思う。学校も野球も分からないに決まっている。首を捻っている勘吉に慌てて、学校は同じ歳の子どもが勉強したり遊んだりするところ。野球は棒と小さな鞠を使って遊ぶものだと伝えた。
「ふーん、羽子板みたいなもんか。じゃぁ、今度そのやきゅうやろう」
「……遊んでる暇なんてないだろ」
明日はまた別の当番もあるし、剣術、槍術、後々は鉄砲も使えなくてはならないらしい。そして、その合間合間に簡単な仕事も貰うそうだから、遊んでいる時間なんてほとんどないのだ。それでも勘吉は諦めきれないのか、できる、できないと問答を交わしていると、

すっと戸が開いて十壱が顔を出した。
「二人とも煩いですよ。明日も早いんですから、もう寝てください」
それだけ言ってまた静かに戸が閉まる。
「お前は俺の母ちゃんか」
そう勘吉が呟いたが否定はできない。満尋も同じことを思った。
すると中から「外で寝たいのですね。どうぞどうぞ」という声が聞こえたので、慌てて部屋に入り頭を下げた。まだ夏の終わりとはいえ夜は冷える。締め出されてはたまらない。
自分の布団を広げて横になると、久しぶりに現代のことを思い出した。家族はどうしているだろう。学校は。友達は心配してくれているのだろうか。いくら考えても答えは出てこない。こちらから向こうの様子など知る術はないのだ。いつか勘吉のように、現代のことを懐かしいと思いながら語る日がくるのだろうか。そうならなければ良い。湯冷めしたのか、布団の中でぶるりと体が震えた。

十五夜逢瀬　1

連日続く厳しい鍛錬に、満尋を含めた新米？衆はくたくただった。新入りの初仕事が近づいてきた為に、鍛錬のレベルが一気に上がったのだ。さらに、最近は読み書き算盤など勉強の方も加わって、身体だけでなく頭も酷使している。同じ言葉を話しているとはいえ、書き方には大分現代と違いがあるのは分かっていたから、一人遅れてしまうことが不安だった。しかし、筆を持ったことの無い者は以外にも多く、満尋一人が悪目立ちすることはなかった。基本的に農家出身の者はその生活からか、読み書きが苦手という者が多かった。

現代で受験生だった満尋には、勉強をするということ自体はあまり苦ではない。何に使うのか分からない三角比や虚数の計算に比べれば、くずれた草書体や旧漢字、算盤の使い方を覚えるなんてよっぽど有意義で容易いことである。十壱も商家出身だというので、この辺りは得意らしい。よく部屋で満尋の復習に一緒に付き合ってくれる。問題は勘吉と二之助だ。二之助は単純に勉強が嫌いなだけでちゃんと教えればできるのだが、勘吉に至っては問題外である。とことん相性が悪いらしく、机に向かえばすぐに夢の世界へ旅立ってしまう。勉強を教えているのは？衆でも上の方にいる京太郎という男なのだが、何度彼の雷が落ちたことか。？衆では時間に厳しいことで有名な彼は、豊富な知識を見込まれて新米の教育も任されている。理性的な人間なのでそうそう感情に走ることはないのだが、勘吉が生徒だと違うらしい。毎夕彼の特別スパルタ補習を受け夕餉の席に現れた勘吉は、稀に見るやつれ具合だった。

「俺もうダメかも。頭の中で算盤の珠を弾く音がする。京太郎さんこえーよ」

大の男がぐすぐすと飯を運ぶ姿は、なんとも鬱陶しいものである。当然それに対する皆の反応も冷ややかなものだ。

「すぐに寝てしまうあなたが悪いんですよ？　むしろ、ご自分の時

間を削ってまであなたに教えている京太郎さんに感謝なさい」
「そーそー、おれだってちゃあんと聞いてりゃ分かるのに。脳みそ筋肉なんじゃないの？」
「算盤も結構、新鮮で面白いぞ」
３対１。当然軍配が上がるのは満尋たちだ。ぐぬぬぬ、と憤りを飲み込んだ後、勘吉はすばやい動作で二之助の魚をかっぱらった。
「あ！　おい！！」
「脳みそ筋肉だからなー。人より腹が減るんだよ」
奪ったししゃもを頭から豪快にばりばりと食う。大人気ないぞ、という満尋の言葉にも耳をかさず、そのまま二之助とじゃれあって騒がしい夕食が終わった。

今日は満月ということで、満尋は夜着のままお座り岩に腰掛けて書を開いていた。本は京太郎に一番簡単な書物を、と言って借りたものだ。武士の子どもが読み書きに使う手習い本らしいが、なかなか面白い。もともと歴史小説や昔を舞台にした大河ドラマが好きだったから、こういうものと触れ合えるのは心が躍る。ちなみにお座り岩というのは、井戸の傍に植えられた芙蓉の木の下にある岩のことだ。座るのに手頃な事から皆にお座り岩と呼ばれている。
空には煌々と輝く満月が浮かんでおり、その光は日が落ちれば真っ暗になるこの世界の貴重な光源となっている。その明るさたるや、本が読めるほどであるから驚きだ。月明かりの下で本を読もうなどと、夜も騒がしい満尋の世界では考えもしなかったことだ。
半分ほど読んだところで満尋は本を閉じた。こんなことをしていると、自分にも随分余裕が出てきたように思えて一人自嘲する。今はただ、半月前までのぼろぼろな日常で手に入れた感覚と身体能力を只管磨き続けている毎日だ。体育や部活動とは違う厳しい鍛錬と学校では決して習わない知識と教養、そして賑やかな仲間に囲まれてあっという間に日々が過ぎていく。本当に自分が高校生なのを忘れそうだ。この世界に来たのはほんの一ヶ月前のことなのに。

満尋は感傷的になりつつある思考を止めるために軽く首を振ると、お座り岩に本を預けて井戸へ向かった。水でも飲んで頭を冷やさないと、このままでは眠れそうに無い。

井戸の中になるべく静かに桶を落として引き上げる。この作業も随分と楽になった。井桁の部分に桶を置いて、直接手で掬って水を飲む。ひんやりとした水が喉を潤し、少し気分も晴れやかになる。もう一口、と桶を見たところで満尋は信じられないものを見た。

桶の中から女の子がこちらをじっと見ている。なんのホラーだろうか。水面に影が映りこむように、女の子の顔が水面に揺らめいているのだ。それも随分はっきりと。霊感なんてないから幽霊なんて生まれてこの方初めて見る。じっと目をそらせないまま見ていると、あまりその幽霊が幽霊らしくないことに気が付いた。好奇心旺盛な瞳は生気に満ち溢れてとても死者とは思えないし、顔だって健康的なものだ。緩く一つにまとめた長い髪の毛を前に垂らして、前髪には年頃の娘らしくピンクのヘアピンでおしゃれをしている。

（は？　ヘアピン？）

それはこの世界ではありえないものだ。夢でも見ている気がしてその鮮やかなピンクから目を離せないでいると、水面の少女は満尋の視線に気付いたのか誘導されるように自分の前髪へ手を持っていき、ああこれか、という表情をした。

視線を満尋に戻した彼女の顔が、瞬間切なそうに歪められる。

自分は今、一体どんな顔をしているのだろう。笑っているのか、泣いているのか、はたまた怒っているのか。彼女の表情からでは分からない。

少女がすっとこちらに手を伸ばすと、ひとりでに桶の水が揺れて彼女は消えてしまった。もう少しだけ見ていたかったと思うのは、さっきまで現代のことを想っていたからだろうか。

十五夜逢瀬　2

翌朝、眠い目をこすりつつ顔を洗いに井戸へ向かうと、手にした桶に昨夜のことを思い出した。手に持ったまま桶をじぃと見ていると、勘吉たちが不思議そうに満尋を観察する。

「満尋？　水汲まないんですか？」

「ああ」

尚も生返事で桶を見続ける満尋に、痺れを切らしたのか勘吉が桶を奪い取り井戸に放り込んだ。ばしゃん、と派手な音を立てて桶は勘吉の手により引き上げられていく。

「どうしたんだ？　なんか悪い夢でもみたのか？」

二之助が心配そうに顔を覗きこむ。悪い夢。そうかもしれない。自分は知らないうちに眠っていて、その上現代のことを考えていたからあんな夢をみたのだ。

「話してみろよ。変な夢なんてこの二之助様が笑い飛ばしてやるぜ！　ほーら！」

二之助が準備万端とばかりに胸を張る。確かに、このまま思い悩んでもしょうがないし、一度彼らに笑い飛ばしてもらってすっきりした方がいいだろう。

「……女の子が出た」

間。

どぼんっ、と先ほどよりも重たい音が井戸の中に響く。

せっかく引き上げた桶を再び井戸の底へと落とした張本人は、にやにや笑いながら満尋の背中をばんばんと力任せに叩いた。

「なーんだよ！　そういう夢？　で、ヤったか？」

「……？　――違う！」

「まぁー、男ばかりですから不満が溜まるのも分かりますよ？　恥ずかしがらずとも……」

「だから違う！！」

「それは笑い飛ばせねーなー。どんな子？　可愛かった？」
「まぁ、普通に可愛いんじゃないか？　ってだから違うんだ！！！」
息を荒げて叫ぶ満尋に三人はわははと大笑いした。何故朝からこんなに血圧が上がる思いをしなくてはならないのか。口にするんじゃなかったと後悔していると、十壱が申し訳なさそうに宥めてきた。
「すみません。珍しいから、つい遊んでしまいました。本当はもっと真剣な話なのでしょう？」
そういうと勘吉や二之助もぴたっと笑うのを止め、「悪い悪い、つい」と謝ってきた。その一体感はどこで手に入れてきたのか。人をつい、で遊ばないでほしい。満尋はがしがしと頭を掻く勘吉を恨めしげに見つめると、夢かもしれないけど、と前置きをして昨夜の話をしてみせた。
「う～ん、それは幽霊でも夢でもなく『影映り』ですねぇ。望月の夜はよくあることです」
話を聞いた面々は特に驚く様子も無く、さも日常的なことのように言った。雨が降ったら雷も鳴る、みたいな感覚なのだろうか。
「いーよなー、俺なんて『影映り』で可愛い子が出たことなんて一度も無いぜ？」
二之助が心底羨ましそうに言った。そもそも『影映り』とはなんなのか。満尋には怪奇現象にしか思えないのだが、怖いものではないような素振りだ。勘吉や十壱も経験があるようだし、一体何なのだろう。
「その『影映り』って何なんだ？」
考え込んでいた満尋を他所に、俺はこんなのを見たことがある、だの各々口にしている三人に聞くと皆目を見開いて驚きを隠せないようだった。
「おいおい、本当か？　どんだけお前は世間知らずなんだよ。どんな偏狭の地から出てきたらそんなことが言えんだ」
勘吉は満尋に呆れた視線を送り、二之助は「信じらんねぇ」と呟いた。十壱ですらその形のいい口をぽかんと開けている。微妙な空

気に居心地が悪くなってくると、満尋は視線を彷徨わせて上手い誤魔化し方を考えていた。
「えーと、『影映り』というのは、まぁ水面に幻が映ることです。あたしらはその幻の国を『月夜里(やました)』と呼んでいますが」
十壱は戸惑いながらも簡単に説明してくれた。
「望月の日はとくにその『影映り』が良く起きるので、月見よりもこちらを楽しむ方々が多いんですよ」
「ま、大体は『月夜里』の景色だけで終わるけどな。人が映ることなんて滅多にない」
勘吉がつまらなそうにそれに続けた。それで女の子が映ったと言ったら騒いでいたのか。ビギナーズラックではないが、図らずもレアな体験をしてしまったらしい。
「『影映り』ってそれだけじゃないぜ」
井戸に寄りかかって言う二之助の言葉に十壱が頷いた。
「移ろうと書いて『影移り』と言う場合もあります。いろんなものが無くなったり、反対に現れたりするんです。無くなった物はきっと『月夜里』にあるんでしょうねぇ」
あたしの気に入りの櫛も一つ無くなってしまったんですよ、と十壱は溜息をついた。切なそうなその横顔から察するに、本当に大事だったのだろう。
すると、いくつもの足音が近づいてきて後からぞくぞくと衆徒たちがやってきた。
「おっと、せっかく混む前に来たのにこれじゃぁ意味ねぇな。お前ら急ぐぞ」
それを見て勘吉が破顔した。この勘吉のくしゃっとした笑い顔を見ると、いつも難しいことはどうでも良くなってくる。それは満尋だけではないようで、「いけねぇ、いけねぇ」と四人慌てて顔を洗った。やってくる顔見知りの衆徒たちに朝の挨拶を交わして、朝餉を食べに食堂へ急いだ。

寄る居待月　1

右肩に激しい痛みがはしって、満尋は思わず膝をついた。腕にびりびりと伝わる衝撃が、持っていた木刀を下へと落とす。
「どうした？　もう終わりか」
目の前で余裕な笑みを浮かべているのは宇木衛門だ。彼はとんとん、と軽く地面をつま先で叩いて、かかって来いと満尋を挑発する。ぐっと歯を食いしばって、まだ震えの残る手で木刀を握ると、満尋はわぁっと宇木衛門に向かっていった。

そもそもの事の始まりは本堂での剣術の稽古中であった。新入りは全員参加。早くから？衆に入っている先輩が一人監修について、それは行われた。満尋は同じ新入り仲間の与市と八弥丸と組んで、一対二の形式で手合わせをする。与市は満尋とおそらく同年代の、鉄砲が得意な若者だ。滅多に人と話さない変わり者であるらしいが、その見事な鉄砲の腕前は逆に皆を黙らせるほどである。もう一人の男八弥丸は与市と同室の男で、二十二歳と新入りの中では一番年嵩だ。質朴な男とは正に彼のことで、真っ直ぐなその性格は得意な剣術にも表れている。そんな二人と木刀での模擬試合をしていると、先輩全員を連れた宇木衛門がやってきたのだ。
「全員いるな。急だがお前たちの初仕事が二日後に早まった。その為、今日明日ぐらいは俺たちが一人ずつ付いて、一対一の指導を行う。お前たちにはまだ死んでほしくないからな」
そう言うと、新入りのうち数名に新たな木刀が配られた。満尋にも渡されたそれは手に持つとずしりとくる。今までの物よりもはるかに重い。
「これは……？」
「真剣とほぼ同じ重さに誂えてある。初めて剣術を扱う奴は、それを肌身離さず持ち歩け。もちろん真剣を持ったことのある奴は、そ

れを使う必要はない」
　つまり、いよいよ実践を強く意識した稽古に移るということか。満尋は渡された木刀を強く握る。本堂の中は静まり返っていた。隣の方でごくりと、唾を飲み込む音が聞こえる。新入りの三分の二くらいが緊張した面持ちで、宇木衛門の言葉を聞いていた。残りは普段通りか、楽しそうな顔をしているか。その違いは真剣、もしくはそれ以外の武器で人と対峙したことがあるかどうかだろう。前の方にいる与市はあまり興味の無さそうな、ぼーっとした表情をしているし、八弥丸は使命感に燃えてはいるものの、特に緊張しているという感じはしない。きっと二人は三分の一の人間なのだ。
「では、それぞれ誰がつくかは籤で決める」
　そうして籤引きの結果、満尋には？衆の頭　宇木衛門がつくことになったのだ。

　それからは指導者に付いて各々解散した。満尋だけは宇木衛門が動かないので、そのまま本堂に残っていたが。
「俺たちはどうするんですか？」
「そうだな。……では鬼ごとでもするか」
「は？」と満尋は聞き返した。皆が一人一人訓練をつけてもらっているのに、何故自分は鬼ごとなどで遊ばなくてはならないのか。宇木衛門は木刀を手にして、「これから俺は明鵠寺を適当に歩く」と言った。明鵠寺というのは、この？衆が拠点としている古寺の寺名だ。随分昔に寺としての役目は終えているのだが、今でも町の人間を含めてここをそう呼んでいる。
「お前は俺から一本取れれば良しとしよう。好きに討って来い」
　「十数えたら動いていいぞ」と宇木衛門は本堂を後にした。つまり鬼役は自分がやるというわけか。本当の遊びでなくて良かったと、一息ついて十数える。頭なんてやっている人間だからめちゃくちゃに強いに決まっている。初めて宇木衛門に会った時を思い出して、満尋は身震いした。一本取れるだろうか。

――――八、九、十！

本堂を駆け出して外に出ると、当然だが宇木衛門の姿は無かった。敷地内のあちこちで稽古をしている衆徒を見ながら、どこへ向かったかを考える。本堂から出て正面は、正門まで何も無いので隠れるところも無い。となると、裏へ回ったかとそちらへ行くと、意外と早くにその姿を見つけることができた。

隠れるでもなく走るでもなく、本当にただ歩いている。警戒している様子もなく、満尋以外のものが見ればただの散歩に見えるだろう。満尋は木刀を構えて彼に向かって駆けていくと、「何してんの？　満尋」と声がかけられた。

どうやら稽古中の衆徒が気になって声を掛けたようだが、その所為で宇木衛門は気付いたようだ。満尋を見てふっと笑うと駆け出して見えなくなってしまった。ちっと舌打ちして後を追いかけるが見失う。そこで満尋は気付いた。どうやら、隠れなければならないのは鬼の方らしい。

庭の植え込みに身を潜めながら、満尋はじっと宇木衛門の様子を窺った。立てば腰ほどまである植物たちは、低く伏せた満尋をすっぽりと覆い隠してくれる。宇木衛門はかつて僧房と呼ばれていた、衆徒が寝泊りしている長屋風の建物の階（きざはし）に座って、稽古中の衆徒の様子を見ているようだ。はっきり言って、正面から向かっていったところで宇木衛門から一本取れるわけが無い。こちらはまだ剣術を始めて十日も経っていないのだ。少々卑怯でも不意をつくぐらいしないとこの鬼ごとには勝てないのだから、ハンデと思ってもいいだろう。ただ、こっそり近づくには他の衆徒に見つかってはいけない。先程の二の舞になるからだ。

できるだけ足音を忍ばせて背後にまわる。まだ距離が開いているので油断はできない。植え込みから離れて縁の側に移動し、静かに上がると、誰にも気付かれないように気配を殺して徐々に距離を詰めていった。こうして気配を殺していると、あの町人から逃げ回っていた日々を思い出す。あの頃自分は何を考えていたか。

――絶対に見つからないように。殺されてしまうから。もっと、もっともっと野生になれ。

肩を狙って振り上げた木刀は、素早い動作で横に薙ぎ伏せられ、腕、肩と続いて鈍い衝撃がやってくる。

「くっ……」

カラン、と木刀を落とすまで、満尋は自分に何をされたか分からなかった。

寄る居待月　2

時刻を告げる鐘が七回鳴る。昼七つ、現代では午後四時過ぎぐらいだろう。今日が夕食当番でなくて良かった、と心底思っていると冷やりとしたものが腕に当てられた。

「……っつ！？」

「はーでにやられたんべなぁ。ちぃっと我慢しろー」

六郎が湿布のようなものを貼り付けたのだ。初めて会った時のように、六郎が手早く手当てしていく。本堂には多くの衆徒たちが集まり、それぞれ治療されていた。

結局最後まで一本も取ることができなかった満尋は、宇木衛門にこてんぱんに伸された。それにしてもまったく歯が立たなかった。本当に人間だろうかと疑うほどだ。

「おめーも運がわりぃなぁ。宇木衛門もちっと加減しねぇか」

六郎は満尋の後ろにいた宇木衛門に小言を漏らすと、これで最後、と腹に湿布を貼って軽く叩いた。

「ん？　なかなか良い気配の殺しっぷりだったからな。やはり、連れてきた甲斐があった」

宇木衛門は反省の様子もなく、一人満足そうだ。こちらは体中木刀で思い切り打たれて、打ち身だらけだというのに。治療のために脱いだ上半身を整えて「どういうことですか？」と聞くと、後ろで胡坐をかいていた宇木衛門は、口元に手をやり可笑しそうに笑った。彼は時々このような笑い方をする。それは見るものをぞっとさせるが、同時に人を引きこんでいくのだ。眼球の僅かな動きですら見逃すまいと、目を逸らせなくなってしまう。

「なに、あの時のお前は正に飢えた獣のようでな。まだまだ未熟だが、？衆に入れてみるのもいいだろう、と。型通りの剣術ばかりではつまらんからな」

そう抜け抜けと言う宇木衛門を六郎は呆れた目で見ていた。いつ

ものことなのだろう。一見彼は実直な男に見えるが、それは違うと満尋は感じていた。先程彼は自分を飢えた獣と称したが、獣のようなのは宇木衛門の方だ。狡猾な思考と鍛え抜かれた身体。行動は慎重かつ大胆に。群れを率いるその姿は、差し詰め狼といったところか。つい忘れがちだが、彼は力でもって自分たちを制する雄（リーダー）なのだ。

「あのぎらぎらした目は良かったぞ。仲間は大事にすべきだが、あまり丸くなってくれるな」

彼は満尋の頭をがしがしと掻き撫ぜると、「明日もしごくからな」と本堂を後にした。その姿を見送りながら、満尋は撫ぜられた頭を手櫛で直した。一体彼は自分に何を期待しているのだろうか。

いつもはあちこちで明かりの点いている衆徒の長屋も、今日ばかりはすぐに真っ暗になり、そこかしこで鼾が聞こえた。散々しごかれたのは自分だけではないらしい。部屋の戸をそっと開けると、衝立の向こうから十壱が声をかけた。

「まだ寝ないのです？」

「ああ、目が冴えてるみたいだ。本でも読んでくるよ」

衣擦れの音がして、十壱が起き上がったのが分かる。手に持った本を見せると十壱は「熱心ですね」と笑った。

「部屋でどうぞ」

「いや、明かりをつけたら寝にくいだろう。……外の方が静かだし」

すると、まるで満尋に抗議するかのように、勘吉はごがーと、掃除機のような鼾を立てた。それを聞いていた十壱は「あまり遅くならないように」と、一言添えて布団に戻った。

しかし、満尋は本当に読書をするつもりで外に出たわけではない。ただの口実だ。今日は彼女との約束があるから。

満尋は『影映り』のことを聞いた後、気になってずっと向こうに呼びかけていたのだ。今までの満尋だったらそんなものは信じないし、試したりもしないのだが、実際にこの目で桶に映る少女を見て

いる。『月夜里（やまし た）』がどんな所かは分からないが、とにかくあの女の子にもう一度会ってみたい。そして今度は話もしてみたかった。少なくとも、あの子は現代となんらかの繋がりがあるような気がするのだ。

満尋は桶の水ではなく、もっと大きな水のある場所を選んだ。丁度、長屋の裏に手入れの行き届いていない荒れた場所がある。そこには隠れるように２m四方に収まる小さな池があるのだ。満尋は暇さえあればその池に呼びかけていた。

そして、『月夜里』の「ヘアピンの彼女」には意外にも早く会うことができた。昨日の夕方、薪割りの仕事が早く終わったので池に呼びかけたところ、返事があったのだ。

「はい、ここにいます」

と、応えた彼女は満月の少女と同じ子だった。落ち着いた色の小袖に、前掛けを掛けている。そして前髪にはピンクのヘアピンが咲いていた。向こうで同じくこちらの影を見たであろう彼女は、柔らかく満尋に微笑んでいた。

会いたいと思ってはいたものの、何を話すかはまったく考えていなかった。満尋はしまった、と思いつつも何か話題が無いか考えていると、突然彼女は、自分は伊月だと名乗り、なんのケーキが好きかと聞いてきた。は？　と思うが満尋も自分の名前を教えて「甘いものは好きじゃない」と答えていた。ちなみに彼女はガトーショコラが好きらしい。なんの意味もないような会話だが、これで彼女が自分と同じ現代人であることが判明した。

一度会話が始まると、その後は途切れることがなかった。お互いに気持ちが高揚していたのだろう。彼女は頬を染めてなにやら一生懸命だった。

さらに質問していくと、彼女は平成生まれの高校生で、二つ年下であること。ひと月前『月夜里』にやってきたという彼女は、おそらく自分と同じような状況であることも分かった。ただ、話を詰めていくと、どうも彼女はあまり自分の周りのことに無頓着だったら

しい。どこの国にいるのか、今何年なのか、誰が領主なのか答えられなかった。領主といえば、彼女はこちらのことを『春日部』と呼んでいたのが少し気になるが。とはいえ、この三つは『月夜里』とこちらの関係を知る重要な手がかりになる。「宿題」という形で、彼女に調べてもらうようお願いした。

それから、同時に時鐘が鳴ったことで時間の流れが同じだということも分かった。少々興奮してそのことを告げると、伊月は「満尋ってすごいね」と、素直な、きらきらとした尊敬の目を向けてきた。あまりに真っ直ぐ見つめるものだから、つい目を逸らしてしまった。絶対顔が紅くなっているに違いない。実際、水面の向こうで笑われた。

今日は、昨日自分が出した「宿題」を彼女は持ってきてくれるはずだ。急がなくてもいいのだが、申し訳なさそうにしていた彼女のことだ。きっとすぐに調べてきて自分に持ってくるだろう。池の縁で膝を立てて座ると、満尋はまだかまだかと『影映り』の兆候を待った。

寄る居待月　3

立膝をついたままうつらうつらとしていると、池の水面が揺らめいた。昨日も見た『影映り』の兆候だ。夜五つを少し過ぎた頃だろう。八時くらいだろうか。「こんばんは」と現れた伊月にこちらも「こんばんは」と返した。

「さっそくだけど、国のこととか聞いてきたよ」

ほら、やっぱり。伊月が予想通りに話を持ってきたので、思わず口元が緩んだ。本当に素直な子だ。こんな子がよくこの世界でやっていけたな、と思う。

「聞かせてくれ」

「えっと、まず私のいるところは『わくれ』っていう国」

『別暮』。つまり、同じ国にいるということか。すると彼女は「でもね」と話を続けた。

「満尋の所と漢字が違うの。私の国は、山に支えるっていう字と、呉服とかの呉の字で『?呉』っていうの。それで、満尋の国は無いって言われた」

同じ音でも漢字が違う、か。確かに自分も主だった国は調べてみたが、そのような国は無かった。ふむ、と手を唇にあてて考えるが、これだけでは何も分からない。

「それで、他には？」

「領主の名前は『やました　きよひろ　よしたか』」

出た。ここでも同じ音の名前。たぶん、これも漢字が違うとかそんな感じだろう。満尋たちは彼女のいる所を『月夜里（やました）』と呼び、領主の家名が『やました』。伊月は昨日こちらの世界を『かすかべ』か、と聞いてきたが、こちらも領主の家名が『春日部』である。偶然と片付けるには出来過ぎている様な気がする。

「最後に、今は天輝四年の八月十八日だよ」

こちらも八月十八日なのは同じだが、元号は元呈五年だ。これは

違うようだなと、自分の思考に耽っていると、水面の向こうの伊月が不安そうにこちらを見つめていた。
「満尋は普段何をしてるの？」
おそるおそる、といった様子で伊月は尋ねる。少しばかり自分の世界に入りすぎてしまったようだ。向こうにばかり話させるのは悪い。
「俺は？衆っていうところに入れてもらってる。傭兵集団っていったら分かるか？　そんな感じだ」
「危なくないの？」
心配そうに伊月が言う。それはまだ分からない。なにしろ稽古しかしてないのだから。でも、何れは戦に駆り出されるようになるだろう。宇木衛門が？衆を惣として強くしたいのなら。とりあえず「今のところは」と答えるしかない。
「まだ、仕事はもらってないけど。今は剣術や馬術……の基本を教えてもらってる」
馬術か……。馬で思い出すのは勘吉しかいない。もう、あんな適当な指導も突発レースもごめんだ。あれからも、馬術では彼のめちゃくちゃな行動に振り回されているのだ。ついこの間のことを思い出していたら、伊月がなにやら慌てて話題を変えてきた。
「わ、私はね、こっちに来て扇子屋さんに拾ってもらったんだ。売るだけじゃなくて、最後の仕上げもしてるんだよ」
そういうと伊月は扇子作りの話や、そこでお世話になっている人たちのことを話し出した。こちらは男ばかりでほとんど明鵠寺を離れないから、職人や町の人たちの話は新鮮だ。
「そこの息子さんね、まだ十歳なんだけどすごく大人びてるの。絶対会ったら満尋もびっくりするから、しっかりしてて。でも、私妹みたいに思われてて……」
年上の威厳が、と落ち込む伊月には思わずははっと笑いが零れた。伊月じゃ、まず年上の威厳なんてものは出せないだろう。だいたい、二十歳まで子どもとして扱われる現代人と、幼い頃から親の仕事を

手伝い、十五にはほとんど元服するこちらの人間とではしっかり度は違うに決まっている。そう言えば、「それはわかってるけど……悔しいじゃん！」と伊月は口を尖らせた。

他にも続く伊月の話に満尋は自然と微笑んでいた。

「伊月は、いい人たちに出会えて良かったな」

心からそう思う。自分はここの生活に来るまでいろいろあった。高校生という自分を手放して、物を盗んで、人から追われて毎日を過ごした。いい人になんて出会わなかった。

伊月は「うん」と笑顔で頷くと、「満尋もそうでしょう？」と尋ねてきた。その言葉を聞いて、満尋は自分の笑顔が凍りついたのを感じた。

きっと彼女はすぐにその「扇子屋」に世話になれたのだろう。あんな地獄のような日々は知らないのだ。満尋が「そうじゃない」とは思ってもいないのだろう。でも、それで良かったとも思う。正直、嫉ましくはある。羨ましい。自分もそうだったらどんなに良かったか。でも、「そうじゃない」自分はここで新しい生活を手に入れることができた。辛いだけの日々は、あの日宇木衛門に遇った時に終わったのだ。だから、伊月が自分はすぐに？衆に世話になったのだと思っているのなら、それでいいと思う。自分がどんな目に遭ってきたかなんて、言う必要はないのだ。

この女の子が酷い目に遭わなくて、本当に良かった。

「？衆の人たちは違うの？」

満尋の表情が変わったのを、伊月は？衆の人たちが原因と勘違いしたようだ。それは違う。彼らにはとても救われているのだ。

「？衆の人達は、本当にいい人ばかりだ。あの人達がいるから今の俺がいる、と思う。男ばっかりだし、莫迦で変な奴も多いけど」

「……そっか」

そう言うと伊月は安心したようだった。それから会話が途切れてしまう。その隙間を通るように風が吹いて、茫茫に伸びた草が満尋の腕や足をくすぐった。もし、自分がクラスのムードメーカーみた

いに話し上手であれば、上手く話を繋げる事ができただろうに。すると、伊月が新しい話を持ち出してきた。少々無理やりな話題転換にも渡りに舟と乗っかれば、彼女は次第に嬉しそうに日常の話を始めた。そういえば、昨日から話の切欠はいつも彼女からくれる気がする。

ほとんど聞き役にまわっていると、彼女を映している水面が少し暗くなった。それに気付いた伊月は、あ、と後ろの方を見る。明かりか何かを置いていたのだろう。どこで『影映り』をしているのか知らないが、あまり遅くまで外にいさせるのは危険だ。

「もうそろそろ寝た方がいいな」

と言うと、とても残念そうにしたのを内心嬉しく思いながら、「ほら、お開きにするぞ」と促した。

「明日も『影映り』できるか？　ちょっと実験したい」

少し気になることがある。昨日今日と同じ場所で『影映り』をしたが、はたして場所が変わっても同じように伊月と話せるのか。

「明日は俺が別の場所から『影映り』をしてみる。ただ、上手くいくかは分からないから、明後日も同じ時間に会おう。その時は今居る所からするから、伊月もそうしてくれ」

「わかった」

「よし。じゃぁ、また明日。……上手くいけばな」

小さくそう付け足せば、伊月はふふふ、と笑った。

「うん、またね。おやすみなさい」

「……おやすみ」

今日は伊月にばかり話させてしまった。ころころ変わる表情と語る話が面白くて、つい聞き役になりっぱなしだったのだ。明日はこちらも何か話題を用意しておこうと心に決めて、『影映り』を終わらせるべく水面に触れた。

更待月の陰　1

満尋は、今日も宇木衛門に散々扱かれた重たい体を引きずって、食堂の裏口から厨に入って行った。今は夜五つ。日のあるうちは、衆徒たちが当番制で飯を作り賑わう厨も、今は誰にも利用されることなく、辺りはひっそりと静まり返っている。器用に高く積み上げられた、大量の皿や盆に触れないように気をつけて、奥の竈の方へ移動した。火を点けた灯明皿を竈の上に置いて、甕の蓋を開けると、中には井戸の水がたっぷり張られていた。

ここへ来たのは、昨日伊月に話した実験をするためだ。伊月はいつもと同じ場所、自分は池を離れてここから『影映り』をする。それで、どうなるのか調べるのだ。一度目は桶の水に映ったのだから、甕の中の水でも大丈夫だろう。満尋は暗い水に向かって呼びかけた。

「おい、誰かいるか？　伊月？」

しかし、水面はゆらりともしない。何度か呼びかけながら、息を吹きかけてみたり、指を突っ込んでみたりしたが変化は起きず、伊月の影は映らなかった。

「駄目か。……場所を変えてみるか」

それから、満尋は思いつく限りの水場を訪れた。井戸、裏山から流れてくる小川、はたまた風呂場まで。しかし、どの場所でも『影映り』の兆候は一向に表れず、最後の井戸を試し終えてお座り岩に腰を下ろした。今からいつもの場所で『影映り』をしてみようか。そう考えていたら、じじ、と皿の火が大きく揺らめき、明かりが一気に小さくなった。皿の中にたっぷりと入れてきた魚油が、すっかり無くなっている。これは、一時間半から二時間は経っている。両手を後ろについて、流石にもう待っていないだろうな、と諦めると僅かな火を頼りに部屋へ戻った。明日はとうとう初仕事だ。昼からなので午前中は自由なのだが、夜更かしするほど胆は大きくない。二人を起こさないように、細心の注意を払って布団に入った。

昼九つの鐘が鳴る。少し早めの昼食を町で済ませた満尋たちは、町の西側の街道に集まっていた。集まったのは九人。皆ほぼ同じ時期に入った新入りだ。

「ひぃ、ふぅ、みぃっと。……よし、全員いるな」

九人の中では一番利発な孫太夫が場を仕切る。八弥丸より一つ年下の彼は、この中で二番目に年長だ。八弥丸はリーダータイプではないし、まとめるのは得意ではないと本人が言っていたので、孫太夫がまとめ役を引き受けたのだ。彼は皆をゆっくりと見渡すと、緊張した面持ちで口を開いた。

「頭から頂いた仕事は、私たちでこの辺りに出没する賊を退治することだ。奴らは、最近この街道を通る商人や旅人を襲っている。ここは真田町（しんた）と隣の太木町、仲主村（なかす）が繋がる重要な街道だ。心して掛かろう」

孫太夫はきりっとした太い眉毛を真一文字にしてそう言った。「おう」と皆が頷くと、少し緊張が解れたのか表情を緩め、荷物の中から褐色の帯を差し出した。

「なんだぃ？　それ」

満尋と同い年だという主膳（しゅぜん）が尋ねた。開いているのか閉じているのか、いまいち良く分からない目が、何に使うんだと訴えている。

「うわっ、お前起きてたのか」

「酷いなぁ、勘吉さん。貴方だって珍しく静かだったじゃないですか。てっきり偽者が紛れ込んだのかと思いましたよ？」

主膳の隣にいた勘吉が大げさに驚いてみせると、主膳は心外だとばかりに眉をひそめた。しかし、勘吉が驚いたのも分かるのだ。彼は黙っていると本当に寝ているように見える。

「ん？　ただの帯じゃん。これホントにどうすんの？」

二之助の隣にいた新左衛門が、褐色の帯を持ちひらひらと振っている。「あっ」と孫太夫が手の帯を確認して、いつのまに、と呟いた。まだ大人になりきっていない、細い体をした新左衛門は、くく、

と笑って「おいら掏(す)るの得意だし、朝飯前。あ、もう昼餉が済んでるから夕飯前？」と軽口をたたいた。何言っているんだ、と周りが笑い出すので満尋が、
「で、本当にどうするんだ。それは」
と、口を挟んだ。話を進めてくれ。
「こほん。これは？衆の証、だそうだ。袴の上から巻いてくれ。今後も仕事の時はこれを巻くように」
孫太夫は、新左衛門以外の全員に帯を渡して回る。皆言われたとおりに袴の上から腰に巻きつけると、一同妙な一体感が生まれた。
「なるほど、確かにこれは？みたいですねぇ」
腹の帯を撫でてしみじみと十壱が言った。どういう意味だ、と聞いてみると、褐色の帯が鳥の？を思わせるのだそうだ。
「見たことねーの？　田んぼの上とか飛んでんぜ。鳶に似てるけど、腹にこんな感じで帯模様があるんだ」
二之助が腹の上で手を動かし、帯を示すジェスチャーをする。
「へぇ、それで？衆か。面白いな」
「おれも今知った。この帯からだったんだな」
生憎、本物の？という鳥を見たことは無いが、鳶に似ているなら猛禽類の一種だろう。この辺りは一面田んぼだから、空に注意していれば見つけられるかもしれない。
すると、ぱんぱんと二拍手の鳴る音がして、孫太夫が皆の注意を自分に戻した。そろそろ出発のようだ。
満尋の腰には、初めて持つ本物の刀が差してある。宇木衛門は、けして稽古中は本物を使わせてくれなかった。ただ、抜き差しの仕方だけ教えてもらう時に、ほんの少しだけ持たせてくれた程度だ。勘吉などに聞いてもそれは同じらしく、八弥丸のように始めから剣術を身に付けていた者意外は、皆真剣を差すのは初めてのようだった。
歩き出す皆の後ろで、満尋はそっと左手で柄の頭を撫でた。そこから、冷やりとした温度が手に伝わって、ごくりと唾を飲む。

（これが、人を殺す道具……）

以前、自分の首筋に宇木衛門が当てた鋭い刃。あの時の冷たさを思い出して体が震える。満尋は、きっと自分はこれを抜けないだろうと感じていた。

更待月の陰　2（前書き）

※グロテスクな描写があります。
苦手な方はご注意ください。

更待月の陰　2

賊を追って満尋たちは街道から外れ、山の中へと入っていた。好き勝手に生えた枝や蔦を棒で払いながら進んでいく。

「頭の話だと、この辺りだな」

孫太夫が地図を広げて辺りを見渡した。木々が鬱蒼と茂り、まだ昼間だというのに薄暗い。宇木衛門たちが先に下調べを済ませているらしく、この辺りに賊が潜む拠点があるとのこと。孫太夫の提案で、三人一組で分かれて捜索することになり、満尋は気心の知れた勘吉、十壱と組んだ。

「なあ、俺たちだけで、何とかなると思うか？」

皆と十分離れた所で満尋はそう口にした。自分を入れて九人。相手が何人いるかしれないが、こちらには素人も混ざっている。対峙しても無事でいられるだろうか。

「そうですねぇ、あたしも言ってみれば今日が初陣ですから何とも……。ただ、宇木衛門殿はしっかりと調べてあたし達に回してくれたのですから、何とかなると信じるほかありません」

「ま、今日までいろいろ俺たちも鍛錬してきたんだし、すぐにやられたりしねぇよ。そう思っとけ」

十壱と勘吉が心配するな、と満尋に言う。確かに、ここで怖気づいて帰るわけにはいかないのだから、勘吉ぐらい気楽に考えた方がいいのかもしれない。悩んでいないで、自分も何か賊の手がかりを掴もうと、満尋は首を巡らした

しかし、薄暗い山の中はほとんど視界がきかない。ただでさえ自分は眼鏡に頼っているのだから、ここは他の器官を使った方が良さそうだと満尋は判断した。すぅ、と意識を切り替えて耳と鼻に集中する。頭の遥か上の枝では鳥の囀りが、少し離れた所では小さな獣が草を踏む音が聞こえてくる。どんな異変も見逃すまいとしていると、煙の臭いが鼻を衝いた。上を見上げると、細い煙が天に伸びて

いる。狼煙だ。
「お、なんか見つけたか。あっちは誰だろうな、八弥丸たちか？」
三人で狼煙の昇った方へ向かうと、孫太夫と八弥丸、与市がそこに居た。しかし、満尋は近づくたびに煙とは違う不快な臭いを感じていた。それは、二人も同じだったようで、顔をしかめている。すぐ後から残りの三人も追いつき、全員が揃った所で与市がおもむろに持っていた棒で藪を開いた。
「うっ」
むわっ、と辺りに強烈な臭いが広がる。何かが腐っているような、とにかく酷い臭いだ。与市は鼻と口を袖で覆い、この臭いの中眉一つピクリとも動かさずに、顎で棒の先を見るよう促した。皆嫌な予感しかしないが、それでも近づいて藪の中を覗き込む。
その瞬間、満尋は己の口を手できつく押さえた。そうしないと、悲鳴も、胃の中の物も、全部出てきてしまいそうだったから。
そこには、腐乱した死体が転がっていた。体つきからおそらく女のものだろう。衣も何も身に纏っておらず、髪の毛は根元からばっさり切られていた。そんな死体が、一つ二つ、全部で六体ある。ぱっくりと開いた傷口には、何かの卵が産み付けられ、そこから孵化した幼虫が這い出し蠢いている。顔は無残にも鳥か何かに啄ばまれたのか、ただ目鼻の位置が分かるのみ。五体が揃っている者はいなかった。
「この向こうに賊が使っているらしい獣道を見つけた。おそらく、その先に拠点としている場所があるはずだ」
八弥丸が厳しい顔をして言った。信じられない。同じものを見たはずなのに、八弥丸は少しも顔色を変えてはいない。満尋は目線を逸らし、ふらふらと後退さると、後ろにいた勘吉にぶつかった。「悪い」と血の気の失せた顔で見ると、勘吉は顔をしかめながらも、その無残な死体を真っ直ぐに見ていた。
「ああ、大丈夫だ。って、お前が大丈夫じゃないな。あっちで吐いとくか？」

少し離れたところを指差して、勘吉が控えめに肩を支えた。首を横に振って返事とすると、「無理するな」とそのまま後ろに回される。嫌な汗が噴出すのが止まらない。気合で吐くのだけは何とか堪えると、揺れる視線で他の人間にも目を向けた。一番年下の二之助や、新左衛門でさえ、青い顔をしながらもしっかりと立っている。自分は、肩を支えてもらってやっと立っていられる状態だというのに。この違いは一体なんだ。

「私たちはもう少し奥へ行ってみるが、満尋はどうする？」

孫太夫が心配そうに満尋に尋ねた。この先もっと過酷な状況になるかもしれないと、死体を見ただけで蒼白になる満尋を案じての質問だろう。

「いや、大丈夫だ。行くよ」

肩を支える勘吉の手をやんわりと押しやって一人で立つ。まだ気分が最悪なのに変わりはないが、ここで一人残るような情けない真似はごめんだ。ほとんど意地だけで立っていると、くん、と袖を引かれた。与市だ。

「……駄目なら帰った方がいい。この先は戻れなくなるかもしれない」

「戻れない？」

与市はそれだけ言うと、八弥丸の後について死体の向こうの獣道へ入っていった。彼は支給された刀ではなく、自前の火縄銃を一丁抱えている。腕前が達者だというそれは、遊びでもなく、見世物でもなく、道具本来の目的の為に使われる。彼とは同い年らしいと聞いていたが、その十八年はきっと自分とはまったく違う年月だろう。初めて耳にした彼の声は、流水のように満尋の中に入ってきて、脳に染み渡った。それでも、忠告は聞けない。どこに戻れないのかは分からないけれど、一度「行く」と口にしたから帰るつもりはなかった。戻りたくないのは、あの最初の半月だけなのだから、進んでも後悔はしない。結局はこのまま、一人駄目になりたくないのだ。

更待月の陰　3

崖の下には自然にできたのか、大きな横穴がぽっかりと口を開いていた。随分と深そうな洞だ。皆でばらばらになり、洞を取り囲むようにして５０ｍほど離れた藪の中に身を隠す。身を低くしてそっと中の様子を窺うが、人が中にいる気配はない。

「全員で出ている？　そんなはずは……」

「誰かが中に入る必要があるな」

孫太夫が僅かに驚きの色を言葉に滲ませると、八弥丸はすぐに次の行動を示した。孫太夫はそれに頷くと、「二、三人誰か行けるか？」と皆に呼びかけた。しかし、洞の中は何が飛び出すか分からない。堂々と松明などは点けられないから、皆及び腰だ。満尋は与市ならすぐに行くと言い出すと思っていたが、右向こうで待機している彼は我関せずの様子で銃を弄っていた。満尋の怪訝な視線に十壱が、

「洞の中は、彼の得意な火縄は向きませんからね」

と、苦笑した。確かにそれはそうだ。的がはっきりしない、暗くて狭い場所で鉄砲を撃つ馬鹿はいないだろう。では誰が適任か、と考えていると、満尋から一番離れた所に居た主膳が名乗り出た。

「孫さん、僕が見てきましょう。気配には敏い方ですから、様子見くらいなら大丈夫でしょう」

「じゃあ、おいらも行こっかな。小悪党の考えならちょっとは分かるしね」

それに便乗するように新左衛門も前に出た。彼と歳の近い二之助が一緒に行くと言い出したが、十壱と勘吉に止められしぶしぶ待機組みにまわった。満尋はその様子を見ながら、腰の刀に手を当てた。まだ、さっきの衝撃はある。あの暗い洞の中にはもっと醜く、惨い現実が待ち構えているかもしれない。それでも、自分はこの？衆で居場所を手に入れなくてはならないのだ。

「俺も行く」
満尋はそう言って主膳の傍についた。皆の表情が言外に大丈夫かと言っているが、引く気はなかった。勘吉が馬鹿言うな、と怒っているが無視を決め込む。
「満尋が……？　でも君はさっき――」
「いいんじゃない？」
戸惑う孫太夫の言葉を遮って与市が言った。その後ろで、日に二度も喋るなんて、と二之助が感動している。
「頭から、気配を読むのも消すのも新入りじゃ一番と言われたんだ。やる気もあるんだし、行かせたらいいじゃない」
至極どうでも良さげにそう言うと、与市はまた愛銃弄りに戻った。これ以上喋るつもりはないらしい。
宇木衛門から、「新入りの中では一番」と言われたのは昨日の稽古中だ。「鬼ごと」の続きをしている時である。一昨日同様、不意打ち戦法で向かっていった満尋だが、結局一本も取れずに終わった。宇木衛門から五回目の返り討ちに遭った時、彼は倒れた満尋に言ったのだ。「剣術はさっぱりだが、気配を隠すのは上手い。読むのも得意だろう？　今回入れた新入りの中では一番だろうな」と。出し抜けに褒められ目を丸くする満尋に、「町人くらいなら闇討ちもできるな」と、最後に嬉しくない言葉を付け加えてくれたが。
そんなやり取りを見ていたか、人伝に聞いたかしたのだろう。与市がそう押してくれたおかげで、満尋も洞の中へ入れることになった。

主膳が先頭、間に新左衛門、殿を満尋という並びで洞の中を進んでいく。入り口は四人横に並んでも余裕がある幅だったが、進むにつれ次第に狭くなり、二人並ぶと窮屈に感じるほどになった。足元には木片や、壷の破片が転がっており、気をつけねば音を立ててしまう。入り口からの光がほとんど届かなくなったところで、主膳が立ち止まった。視線を向けられ、満尋は頷く。奥からは何の物音も

気配もしない。
先に進むとどうやら開けた空間に出たようだった。主膳は火打石で棒切れに明かりを点けると、そこには賊の居住していた残骸が散らばっていた。火を分けてもらい、三人で辺りを隅無く探索する。二十畳ほどの空間には、ムシロや汚れた着物、割れた陶器、何かの獣の骨が至る所に散乱していた。
「どうやら無人だったみたいだねぇ」
「ああ」
主膳がのんびりと辺りを見渡す。満尋もぐるりと一周歩いてみたが、誰かが隠れるような場所は無いし、先に続く道もない。ここで行き止まりだ。
「なぁんか、緊張して損した。おいら、外に誰もいないって伝えてくる」
新左衛門はぐっと伸びをすると、韋駄天の如く外へ駆け出していった。確かに拍子抜けだ。いや、賊と鉢合わせしても困るが。
「こういう洞穴のアジトって、普通トラップとかあるよな」
「へぇ？」
「あ、いや。……罠とかあるかも、とか？」
狭い空間の中では、小声で溢した独り言も拾われてしまうらしい。慌てて言い直すと主膳は小首を傾げた。
「満尋は面白いことを考えるなぁ。罠、罠……。落とし穴くらいはあるかもね？　でも、話を聞く限り、そんなに頭の働く奴らには思えないけど」
さらり、と毒を吐いた主膳に満尋は乾いた笑いを返す。まあ、トラップ云々もゲームとか漫画の話だ。本気で言ったわけじゃない。もう出るか、と主膳と二人来た道を引き返し、外で待っていた者たちに合流して中の様子を話して聞かせた。
「うむ、もうここは使わないかもしれないな。？衆が調べていることに気付いたのかもしれない。今日は一旦帰って、指示を仰ごう」
孫太夫の言うことに賛成し、赤みの増した山中を急いで明鵠寺へ

と戻る。途中、あの名も知らぬ女たちの骸の前を通った。十壱だけは彼女たちの前で、短く手を合わせ拝んでいたが、他の者は軽く見遣るだけでそのまま素通りして行った。その後を視界に入れないように早足で駆け抜けると、引いたはずの汗と気持ちの悪さがどっと戻ってきた。皆は顔色の優れない満尋を、気にかけつつ見ない振りをしてくれる。満尋はそれをありがたいと思いながら、宇木衛門の前に立つまで終始無言でいた。

更待月の陰　4

「そうか、ご苦労だったな。一応今回のことは紙に認(したた)めておいてくれ」

宇木衛門は孫太夫の報告を聞くと、まず皆に労いの言葉を掛けた。初めて入る宇木衛門の自室は、満尋が三人で使っている六畳一間よりも少し広々としている。離れにある彼の部屋は、元は住職が住んでいた方丈庵という建物だ。四畳半の建物ということから付いた名だが、それは元がという話である。実際この方丈は八畳と六畳の二間の構成だ。流石に全員は入る必要がないので、まとめ役の孫太夫と洞に入った満尋、主膳、新左衛門が部屋に入る。整理の行き届いた室内には、難しそうな兵法書や、どこかの地図など戦関連のものが積まれていたが、机の隅には小さな紫色の実が鈴なりについた枝を、一輪挿しに飾っていたりもする。花や実を愛でるような人だとは思っていなかったので、満尋にはそれが少し以外だった。

報告が終わり四人で退室すると、宇木衛門は満尋を引きとめた。三人には先に帰ってもらい、一人残る。何事かを書き留めていた宇木衛門は、筆を置くと満尋にもう一度座るよう促し、本人は楽な体勢になり机に頬杖をついた。

「どうだ、満尋。初めての仕事は。……顔色が随分と悪いな。六郎を呼ぶか？」

「……いえ。どこが悪いというわけではないので、大丈夫です」

「仏でも見たか？」

宇木衛門は口元をにやり、と持ち上げる。満尋は正座した膝の上で、両手を固く握り締めた。満尋にはまだ、あの異臭を放つ無残な骸達が人間の成れの果てには思えなかった。人は、死んだら丁重に弔われて、燃えて、灰となって、消えて逝くものではないのか。では、自分が見たあれはなんだ。

宇木衛門は膝を立てて満尋へ向き直ると、「どうする？」と問う

てきた。質問の意味が分からず宇木衛門の顔を見ると、彼は笑いもせずただ無表情で満尋を見ていた。
「どうする。まだこの程度は温い方だ。お前はその先にいけるか？」
射るような視線に、満尋は瞬きもできずに固まった。似たような質問を与市にもされた。与市には「いく」と答えたが、何故か宇木衛門にそう答えるのは躊躇われた。
「お前は俺が無理やり連れてきて、強引に入れたに等しいが、ここで立ち止まった人間を抱えるほどの余裕は？衆には無い。お前は付いてこられるか。この先に」
宇木衛門の静かな気迫は、満尋を圧倒した。彼の言っていることはつまり、死体で怖気づくくらいなら？衆を出て行け、ということだろうか。
「俺はこれから六郎と話すことがある。悪いがもう出るぞ」
机の上の書類をいくつか手にして、宇木衛門は部屋を出て行った。
満尋は、先ほどまで宇木衛門の座っていた所に目を向けたまま、動けなかった。ここを出て自分に一体なにが出来る。まだ知らないことも沢山あって、ここには満尋を守ってくれる法律も無い。大人もいない。？衆を出て一体どう生きるのだ、自分は。
机の上に飾られていた紫の実が一粒ぽとり、と落ちた。
満尋は弾かれたように立ち上がると、部屋を出て宇木衛門の背中に叫んだ。
「俺は！　ここで頑張ります！　何があっても、付いていきます！！」
宇木衛門は一寸立ち止まったが、振り返ることなくすぐに歩き出した。
「消去法で決めると後悔するぞ」
そう呟いた彼の声は、満尋には届かなかった。

ほとんど手付かずの夕餉を終えて、満尋は早めに池の辺に来ていた。昨日は会えなかったが、今日は伊月と話せるはずだ。約束の時

間までは、話の話題を考えることに充ててみたが、あまりいいネタは思いつかなかった。時折ちらつく今日の出来事が、ほのぼのとした話題を考える邪魔をした。

そうこうしていると、水面が揺らめき伊月の影が現れる。伊月は満尋の顔を見るなり、「昨日はごめん！」と猛烈な勢いで謝ってきた。なんのことか、心当たりの無い満尋が目を丸くすると、伊月は訳を話し始めた。

「私昨日途中で寝ちゃって……。『影映り』気付かなかったかも。本当にごめん」

「寝た……って、外だろ？　馬鹿かお前！！　現代だって危ないぞ。……何も無かったな？」

満尋が今度は別の意味で目を丸くし声を荒げると、伊月は首を竦めて「大丈夫でした」と答えた。現代もこの世界も、どんな人間がいるか分からないのは一緒だ。まったく無用心すぎる。

「……昨日だけど、結局『影映り』は失敗だ。なんの予兆も起きなかった。付き合わせて悪かったな」

「そっか。私も満尋も、今居る所からじゃないとできないんだね。了解」

そう笑う伊月の顔に、昼間の女の骸が重なった。息を呑んでたじろぐと、水面の向こうからこちらを案ずる声がする。

「満尋？　大丈夫？　顔、真っ青だよ……？　具合悪いなら、今日はもう終わりにしよ？」

「だ、いじょうぶだ。光の加減だろ。……何の話だったっけ？」

自分でもこれは無理がある、と思いながらも誤魔化されてくれ、という気持ちで話を続けた。このまま布団に戻ったって、どうせ眠れやしない。伊月は不安げな顔はしつつも、「昨日の『影映り』は上手くいかなかったって話」と、流してくれた。

それからは、いつものように何気ない会話が始まった。会話といっても、話すのはほとんど伊月だが。今夜はまるで、自分の口が他人のもののように感じる。重たくて、無理に開こうとするも言葉が

出ない。それでも、彼女が話すたわい無い話を聞いていると、少しずつ気持ちが落ち着いてくるのだから不思議だ。
「そういえば、学校とかどうなってるかなぁ？　捜索願とか出てたりして」
「さぁな」
「テストが溜まってたらやだな。満尋は頭良かった？」
「それなりに勉強はしてたからな。というか、俺はテストどころか受験だぞ？」
　テストぐらいがなんだ、と苦笑すると伊月も声をあげて笑った。こうして、二人で現代の話をしていると、昼間の出来事が夢のように思えてくる。向き合わなくてはならない現実だと理解しながらも、今だけは目を逸らして無かった事にしたかった。

暁光はまだ　1

満尋は門前の塀に寄りかかって、勘吉、十壱を待っていた。三人で町の見回りに行くためである。肩透かしのような初仕事の後は、ずっと安全な仕事が続き、賊の洞を三人ずつで見張るローテーションを回しながら、近場の町の依頼で、見回りや門番などをこなすことが日課となっていた。

宇木衛門が懸念したとおり、春日部幸望公が領主となってから領内の政治は悪い方へと傾き、町の防衛のために駐在していた兵は城下へと集められた。彼らを呼び戻すには、莫大な金を役人に渡さねばならず、それができない町や村はたちまち悪党の餌食となった。そんな中現れた？衆は、彼らにとってまさに救いの光である。もちろん金は払ってもらうが、役所に渡す額に比べればとても良心的だろう。

今日行く町は、満尋が初めて宇木衛門に会った真田町（しんた）だ。内心複雑ではあるが、仕事だと割り切って見回りに専念することにする。後は、町の人が自分のことを忘れているよう願うばかりだ。

「お、満尋。良かった、いつも通りだな。心配したんだぞ」

門のところで、およそ四日ぶりに会う先輩衆徒が声を掛けてきた。馬から降りた彼は、手綱を引きながら満尋を見て相好を崩した。四日前、初めて見る人間の死体に、真っ青になって返ってきた満尋をひどく心配してくれたのだ。次の日の早朝、彼は仕事で明鵠寺を離れてしまったが、その間もずっと気に掛けてくれていたようだ。「おかげさまで」と笑顔で返すと、「そうか、そうか」と満尋の背中を叩いて厩の方へ向かっていった。

正直、こんなに早く気持ちを切り替えられたのは、伊月のお陰である。きっと、あの時『影映り』をしないまま布団に入っていたら、間違いなく自分は悪夢に侵されていただろう。あの夜、上手く気持ちを紛らわせることができたお陰で、満尋はなんとか立ち直ること

ができていた。
　しかし、昨日の『影映り』は少し伊月にきついことを言ってしまったかもしれない。というのも、彼女が元の世界へ帰れると簡単に言い出したからだ。帰りたい、という気持ちは分かる。自分だってそうだ。もし？衆に出会う前に帰る方法が有ると言われたら、間違いなく満尋はその方法で現代に帰っただろう。でも、実際はそんなこと言われなかったのだ。これをしたら帰れるだとか、何か役目を果たせば戻れる、なんて条件は自分たちには無かった。そんな自分たちが帰る方法を見つける、という行為は、暗闇の中を手探りするようなものだ。何を探せばいいのか、何処を探せばいいのか、まったく検討がつかない。
　伊月は帰る方法は絶対にある、と言った。ここに来ることができたのだから、帰ることも可能だ、というのが彼女の言い分だ。だが、いつ帰れるかも分からない、そもそも帰る方法があるのかすら分からない。そんなものに、伊月は自分の一生を全て捧げるつもりなのだろうか。
　ギリシャ神話のパンドラの箱。あらゆる災厄を閉じ込めた箱の、最も奥にしまわれていたのは「希望」だった。多くの本では、希望があるから安心して、というニュアンスで書かれていたが、満尋は以前から別の解釈の方が自然だと思っている。
　「無いことの証明は不可能だ」と自分は彼女に言った。どこかで区切りを付けなければ、疲れきって、そして壊れてしまう。箱の中には災厄しか入っていないのだ。それに気付いて欲しくて、多少強く言ってしまったけれど、彼女は分かってくれただろうか。
　『影映り』は月の満ち欠けに左右される。欠け始めた月の影響で、伊月の顔は今までのようにはっきりとは映らなかった。もしかしたら、ノイズ交じりの水面の向こうで、泣いていたかもしれない。
「――悪いな、遅くなった。……なんだ、また湿気たツラして。腹でも下したのか？」

「……違う。なんでもない、ちょっとした考え事だ」
無意識に表情が暗くなっていたのだろう。走ってやって来た勘吉が満尋の顔を覗きこんできたが、大丈夫だ、と微笑む。大丈夫だ。自分も、きっと伊月も。
「真田町かぁ、俺はまだ行ったことねぇんだよな。結構大きかったら三人で回るの大変だよな。――あ、おおーい！！　遅ぇぞ十壱ぃ！！」
誰かが走りよってくる音がしたな、と思ったら十壱だったようだ。まだ、こちらと少し距離のある十壱は「すみませーん」と、言いながら走ってくる。近づくにつれ、彼の長い髪の毛が、動きに合わせて右に左に大きく揺れるのが見えた。やはり、髪は短い方がいいのではないだろうか。
「遅くなってすみません。……行きましょうか」
三人揃ったところで、腹に褐色の帯を巻く。これで良し、と皆で頷いて門の外に出た。山の中にある明鵠寺は、一歩外へ出たら延々と坂道である。傾斜はきつ過ぎず緩過ぎず。落下防止の柵も何も無い山道を下っていく。少し道端に目を向ければ、白や黄色、紫といった秋の花々が、控えめながらにも美しく咲いている。あまり花には興味が無かった所為で、名前が分からないのが残念だ。
「そうだ、勘吉。町の規模だけど、たぶん中くらいじゃないか？三人で回るなら、丁度良いと思うぞ」
？衆に入る前は、いろんな町や村を転々としながら、その中を走り回っていたのだ。真田町も、だいたいの所は回ったことがあるはずだ。少し記憶を遡って、町内の地図を頭に描いていると、その隣で勘吉と十壱は目を丸くしていた。なぜ、そんな顔をされたのだろうと、訝しげに見ると、二人はばつが悪そうに苦笑した。
「悪い悪い、ここでも世間知らずを発揮するかと思ってよ」
「もしかして、以前住んでいたのですか？」
勘吉の言うとおり、あまり説明する側に居なかったので気持ちは分かるが、はっきり言ってくれる。そろそろ世間知らずではなくな

っている筈だ。そして、十壱の質問にはなんと答えればよいか。確かに住んではいたが、明らか歓迎はされていなかったし、それ以前に定住していた訳ではない。とりあえず、「立ち寄ったことがあるだけだ」ということにしておいた。

「じゃあ、案内はお前に任せるな」

その言葉にこくんと頷いて、町がどんな様子だったかを思い浮かべる。町人たちの般若のような顔を記憶から追い出して、町の地理を思い出すことだけに専念した。

暁光はまだ　2

町での見回りは、満尋の緊張と心配を他所にすんなりと終わった。念のために眼鏡を外していたこともあるだろうが、町人たちは、約一ヶ月前に追い回した満尋の顔などすっかり忘れているようで、三人に「ご苦労さん」等と、にこやかに声をかけてくる者もいた。市では乾物売りを中心に盗みを働いていただけに、満尋は心中複雑だったが、また追い掛け回されなくて良かった、と安堵の気持ちも大きかった。二人は、町に着くなり眼鏡を外した満尋に疑問を抱いていたが、有事の際に壊したくないからと適当なことを言ってごまかした。日がある内に夜間担当の者と交代をして町を出ると、街道に入るなり即座に眼鏡をかけた満尋を、二人は呆れた顔で見た。

「その“めがね”とやらが無いと、あまりものが見えないのでしょう？　見回りの時も付けていれば良かったじゃないですか」

「確かにぼやけるけど、歩けないほどじゃないし……。何があるかぐらいは分かる。町でも問題なかっただろ？」

今回は何事も無く見回りは終了したが、諍いに遭って本当に壊れてしまったら大問題だ。フレームが壊れるくらいなら何とかなりそうだが、レンズはもうどうにもならない。新しく作り直すことも不可能だろう。今までもうっかり壊してしまうのが怖くて、馬術と鉄砲術以外の稽古では時々外していたくらいだ。？衆は荒事が多いから、今度暇な時に眼鏡ケースでも作った方がいいかもしれない。

日が沈む前に明鵠寺に戻ると、二之助が門前で三人を待っていた。地面には暇だったのか、たくさんの落書きが描かれている。あの、カブにかまぼこを二つくっつけて、笑っているのはもしかして自分の顔だろうか。隣に満尋と書いてある。

「やっと帰ってきた！　そろそろかと思って待ってたのに、待ちくたびれたぜー」

「悪かったな……って、なんだこりゃ？　これ俺の顔か？　名前無

かったら絶対わからねぇな」
　勘吉は足元の似顔絵を見ながら、へたくそめ、と大笑した。九人分の似顔絵は、確かに上手ではないが、見ていると段々本人に似てくるから不思議だ。
「そうでも無い。良く似ている」
「ええ、本当に。あたしの顔もあるんですか？　嬉しいですねぇ」
　満尋と十壱が褒めると、「そうだろ？　分かる奴には分かんだよ」と、二之助は勘吉を睥睨した。「それで、二之助はどうして待っていたんでしょうか？」と、十壱が口争いを始めた二人をやんわりと窘め、話を変える。
「あ、そうそう。孫太夫がさぁ、夕餉の前にちょっと集まろうって。三人とも外に出てたから、ここに居た方がすぐ会えると思ってさ」
　集まるのは長屋の空き部屋だそうで、もう他の皆はそこに居るらしい。満尋たちはまず足を洗ってから、二之助と共にその空き部屋へ向かうと、狭い一間に神妙な顔をした皆がぎゅうぎゅうと詰まっていた。
「ああ、お帰り。適当に座ってくれ」
　孫太夫が一番奥の位置に座り、あとの者たちは車座になって胡坐をかいている。しかし、一部屋に大の男が九人も集まると、単純に狭いというだけでは無い気がする。部屋の敷居を跨ぐと、なんだか空気が変わったような感じがした。要するに、むさ苦しいのだ。少し詰めてもらって入り口側に座ると、孫太夫が話を始めた。
「実は、この間の賊がまた現れたらしい」
　今日見張りに向かっていた新左衛門たちが行きの途中、街道を通る商人たちから聞いた話らしい。なんでも、今度は少し離れた所の山道に出るのだそうだ。おそらく、あの洞を根城としていた賊だろうと、もう一度自分達が彼らと対峙することになったというわけだ。しかし、こちらが動いているのに気付いていながら、こんなに早く姿を見せるとは。話を聞いていた面々も、どこか呆れ顔だ。確かに、以前主膳が言っていたとおり、彼らはあまり頭が良くないのかもし

れない。
「そういうわけだから、明日から賊退治を優先に仕事を組むことになった。それでここからなんだが、この間のようにまた雲隠れされても困る。確実に捕らえる方法をとりたい」
孫太夫が皆を見渡す。集まったのは、それを決めるためのようだ。皆それぞれどうするべきか考えているのか、一斉に黙り込む。満尋も顎に手をやり考えると、孫太夫が気まずげに手を挙げて、「一応方法は考えてみたんだ」と、口にした。
「商人のふりして、わざと襲わせるという手なんだが……」
その言葉に誰もがやっぱり、という顔をした。皆同じ考えに辿り着いたのだろう。現行犯で捕まえるなら、やはりおとり捜査が一番手っ取り早い。もちろん、必ず賊に襲われるとも限らないし、おとり役の人が危険に晒されるというデメリットはある。しかし、また場所を変えられてイタチごっこになるよりましだ。確実に、というなら、これが現状一番いい方法だろう。問題は。
「商人を誰がやるか、だな」
ぽつり、と八弥丸が溢し、皆に緊張がはしる。正直誰もそんな役はやりたくない。ほとんどのものが、刀を持ってやり合ったことの無い素人なのだ。こと満尋に至っては、殴り合いの喧嘩すらしたことが無いのである。勘吉が顔の前で激しく手を振り、僅かに上ずった声をあげた
「こ、ここはやっぱり、襲われそうな人選んだ方がいいんじゃないのか？　それだと、俺は向いてないだろ？　……例えば、十壱とか、二之助とか」
すると、勘吉を挟んで座っていた十壱と二之助が鋭い目つきで睨みを利かせた。突然白羽の矢を立てられた二人が、黙っているはずも無い。
「勘にぃ、ふざけんな！！　ぜぇったい、おれはやらないからな！！」
「あたしもやりませんよ。こういうのは、襲われても大丈夫な人が

引き受けるものです」
　それからは、あいつだこいつだと役の押し付け合いが始まった。参加していないのは、なんとかまとめようとしている孫太夫と、やはりこういうことに興味がないのか、ぽけっとしている与市くらいのものだ。一人八弥丸が、自分が引き受けても良い、と自ら名乗り出たが、がたいも良く、とても商人とは思えない風貌の彼は、皆から却下を貰っていた。
　結局、ぎゃーぎゃーと煩く騒ぐ面々に、「もう皆で商人やればいいんじゃないか？」と、投げやりに呟いた満尋の案が採用された。「全員でどうするんだ」という声を全て無視して集まりを解散すると、満尋は孫太夫、与市と一緒に食堂へ向かった。これ以上長くなると、食いっぱぐれてしまう。とりあえず後の采配は、孫太夫が上手くやってくれるそうなので彼に任せることにして、今日はいつもと違う面子で静かな夕餉を取った。

暁光はまだ　3

少しずつ色づき始めた原生林の山道を、荷車を引いた一行がえっちら、おっちらと登っていく。高く伸びた樹齢数百年という木々は、昼間の日光を見事に遮り、切り開かれた山道以外を薄暗く演出していた。まるで、人間はこちら側に入ってくるな、と山そのものが言っているようである。枯れた落ち葉を踏み鳴らしながら、烏帽子を被った五人の商人は、やたらと重たい荷車に息を切らしていた。

「な、んで、全員商人って、こういうことかよ」

後ろで荷車を押していた二之助が、愚痴を溢す。前で満尋と一緒に車を引いていた新左衛門が、「おいら疲れたー、交代だー」と音をあげる。

「しっ。新左衛門、気付かれる。疲れているのは、皆一緒だから、頑張ってくれ」

「満、尋の、言うとおりだ。もうすぐ、朱泪の滝が、あるから、そこまで……」

隣の新左衛門に静かにするよう声をかけると、満尋と一緒に彼を挟んでいた孫太夫も励ましにかかった。かくいう孫太夫も、息絶え絶えである。道のすぐ下方には渓流がさらさらと流れており、その流れに轟々と水の落ちる音が混ざりこんでいる。滝が近いというのは本当のようだ。

「そこまで、って言います、けどねぇ。交代なんて、ありゃしない、でしょうに」

二之助の隣で顔を赤くした主膳が、憎憎しげに恨み言を漏らす。すると、車に被せられた布がもぞもぞと動き、僅かに捲りあげられた隙間から陽気な声が飛び出してきた。

「いやー、悪いな。俺たちだけ快適でさ」

布に隠れているのは、勘吉、十壱、八弥丸、与市の四人である。採用された満尋の「全員商人」作戦は、荷物役を新たに加えること

で実行に移された。実際、荷物のある方が、商人らしくなり目も付けられやすく、こちらも物騒な武器の類を隠せるので中々良案であった。そして、二日の準備期間を経て、ようやく今日決行日を迎えたのである。

とても商人には見えない八弥丸は、強制的に布の中で待機してもらい、気配に敏い満尋と主膳は外で荷を引く役目を任された。一応指揮をとる立場にある孫太夫も、同様に外の配置である。そして、残った五人で分かれてもらったのだが、これが失敗だった。公平に決めようというので、満尋が教えたジャンケンでメンバーを決める。しかし、勘吉と与市が、荷役に回ったのは間違いだと気付いたのは、山道に入ってからだった。まず、勘吉は八弥丸に次いで体格がいい。太ってはいないが、筋肉があるためかなり重量があるのだ。そして、与市は着痩せする見た目の割りに結構力がある。彼の小筒は重さが約一貫と三斤。だいたい5，6キログラムもあるのだ。それをいつも持ち歩いているのだから、九人の中でも力自慢の人間に入る。二之助か新左衛門の変わりに与市が商人側に来てくれれば、この道中も少し楽だったかもしれない。

「替わってやりたいけど、ここで俺たちが出てっても怪しいだけだろ？　頑張れ、頑張れ」

「煩い、荷物は黙ってろ」

元気の有り余っている声を聞くと、どうも苛苛してくる。とても笑顔で「応援有り難う」と言う気にはなれない。

黙々と山道を進んでいくと、ようやく朱泪の滝に辿り着いた。ここまではなんの問題も無く来ることができたが、気は抜けない。万一、賊と鉢合わせしたときに、商人役が満身創痍では大変なので、五人のためにここで充分休憩を取ることになった。

白い一本の糸のような水が、滝壺へと流れ落ちていく。腹に響く滝の音に心地よさを感じていると、年少組みの二人が水辺へ駆け出して行った。危ないからと、道中外していた眼鏡をかけると、見事な自然の雄姿が目に入る。満尋は厳かな滝の姿に思わず溜息をつく

と、隣に主膳と孫太夫がやってきた。
「清らかなものですねぇ。先までの荒れた心が洗われるようです」
本当に、煩くてやたらと重たい荷物のことなど、どうでも良くなる素晴らしさだ。白い流水、苔むした緑の岩。そこに、まだ青々とした葉が紅や黄の紅葉に変わればもう言葉は出まい。乾いた岩に腰を下ろして、水でも飲もうかと水筒を探ると、筒袖の衣のどこにも見当たらない。満尋はどこかで落としてきたか、と慌てるが二人も同じだったようで、三人揃って首をひねる。すると、滝壺へ一直線の年少組みが、五つの竹筒を手に戻ってきた。
「ああ、新左衛門か」
掏(す)りが得意だと言った彼は、おそらく気を利かしたつもりなのだろう。しかし、いつの間に持っていかれていたのやら。仲間なのだから、せめて一声かけてほしい。「水汲んできたぜ」と竹筒を差し出した新左衛門に、苦笑して礼を言うと、そのまま栓を抜いて水を飲む。汲まれたばかりの水は、ひんやりと喉を潤し満尋の疲れを癒していく。この水が、あの滝から汲まれたものだと思うと、なんだか少し恐れ多いような感慨深い気持ちになる。
「滝壺には何かあったかぃ？」
「ヤマメがいたくらいかな。仕事じゃなかったら、釣りでもしたんだけど」
「もう少し時期が遅ければ、散った紅葉が川を流れて、見事な錦が見れたんだが」
紅葉はまだまだ始まったばかり。緑の多い枝を少し残念に思いながら、満尋は辺りを見渡した。滝の周りだけ木々が開けているので、まるでここだけスポットライトを浴びているように明るい。満尋は、なんとなく嫌な予感がした。滝の音が激しいので、音が拾えない。もう少しこの景色を堪能していたいが、なるべく早く離れた方がいいだろう。
「孫太夫、そろそろ……」
「うわあああっ」

突然、満尋の声を遮って誰かの悲鳴があがった。見ると、ぼろぼろの男が覚束無い足取りでこちらへやってくる。何事かと皆で近寄ると、その男は二之助にしがみついて汚い顔を涙で濡らした。孫太夫が小さく手で合図をし、荷に隠れている四人にまだ待機しているように指示を出す。男は切れ切れの息をなんとか整えて、涙ながらに訴えた。

「助けてくれ。この先で、ぞ、賊が出たんだ！　み、皆殺されっちまってよぉ。頼む。俺は死にたくねぇ！　助けてくれ！」

ものすごい力で縋られ、二之助がたたらを踏んだ。満尋がなんとかその男を引き剥がすと、今度はこちらに取り付いてきた。どうにか宥めようとするが、恐慌しているのかちっとも落ち着いてくれない。このままでは、賊に騒ぎを聞きつけられてしまう。

「あの、もしもし？　少し落ち着いてもらえないか」

孫太夫が満尋と共に男を取り押さえにかかるが、なりふり構わない男の力はすさまじく、二人掛かりでも難しい。すると、新左衛門がひゅっと息を呑んだ。

車の周りを十数人の男たちが囲んでいる。皆、毛皮の衣を身に纏い、手にはぎらぎらと光る刃が握られている。賊だ。彼らは、こちらを警戒しながら徐々に近づき、その内の一人が車の荷に手を出した。

「――みんな！！」

「八弥丸！！　賊だ！！！」

満尋と孫太夫が叫ぶと、布が大きく捲りあがった。そして、一閃。手を伸ばした賊が一人、血飛沫をあげて地面に倒れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4994w/

水面の月～The Reverse Of The Girl～

2011年10月26日06時16分発行